

*I talk about the previous state for hours of years*

*Infinite form, or liquid, or the case that it is not possible to preserve it  
On the way of story, or unarrangement, or the case not forgotten.*

*The name is "————"*

*I don't know the name*

*I tried to say*

*Dictionary, dictionary, material, words, record, memory, sign, and  
sign*

*The fragment of the fragment is quirked!*

*N. In short, time of years or the following current stream are told*

A photograph of a grand, dimly lit library. The room features tall, dark wooden bookshelves filled with books, a balcony with a decorative railing, and a large, ornate wooden desk in the foreground. Several warm, glowing lights hang from the ceiling, illuminating the space. The word "material" is overlaid in white lowercase letters across the center of the image.

m a t e r i a l



# C h a r a c t e r

## Contents

序文	06
目次	07
荻崎青子	08
久遠寺有珠	10
旧セイバー&旧主人公	12
バルトメロイ・ローレライ	16
Prelude I	18
荻崎檀子	24
洗脳探偵	26
少女	28
ゴドー	29
斬撃皇帝	30
白き月姫ファンタズムーン	32
ミスター・ダウン	34
Prelude II	36
ロード・エルメロイⅡ世	40
モードレッド	42
カレイドルビー・シュバインシュタイン	44
アインツさん家のイリヤさん。	45
三枝由紀香	46
帽子の少女	47
魔法のお手伝いさんマジカルアンバー	48
石杖アリカ	50
迦遼カイエ	51
DDDラフ	52
干将莫耶オーバーエッジ	53
グランスルグ・ブラックモア	54
メレム・ソロモン	56
四大魔獣	58
Prelude III	66
ORT	70
有間都古	72
ハンダ師匠	73
各種ラフ	74
キャラクターデザイナーズコメント	77
奥付	78



## Introduction

## 蒼崎青子

現代に生きる魔法使い。  
孤高で、不器用で、けれど自由な、わりかしどこに  
でもいる十六歳の女の子。

魔術師としての人生をあっさり受け入れながらも、  
まっとうな人間としての生活も愛している強い人間。

同居人曰く、天然である事を自覚していない秀才、  
だとか。

魔術を習い始めたばかりなので腕前は半人前以下。

目下、友人であり共犯者である久遠寺有珠の指導の  
もと、マイペースに成長中。

十六歳にして街の霊脈管理を任せられ、以後、ちょこ  
ちょこと現れる外敵を迎撃する事に。忙しい毎日だが、  
文句を言いつつ楽しんでいるようだ。

天然故か、それともそのあたりがアレなのか。

怪物と呼ばれる祖父を特別恐れておらず、仮にも魔  
法を渡み上げた大師父を“偏屈で長生きしているダメ  
じいじ”くらいにしか思っていない。

ある時期までは魔術のみによるスタイルに重きを置  
いていたが、新しい同居人が転がり込んできた後は格  
闘技に依り、白兵戦を前提とした魔術スタイルに切り  
替わる事になる。

## 蒼崎家の事情

魔術協会から異端とされてきた魔導の名門。日本でも有数の歪霊脈を持つ土地の管理者。

青子の祖父らしき人物は秘法を握り当てた『魔法使い』で、蒼崎の後継者というのは魔法使いの後継者である事を示す。

しかし、その偉大な人物も子供・弟子には恵まれなかった。蒼崎の人間は年々魔術回路が失われており、青子の両親にいたってはほぼ無し。名門・蒼崎の歴史は今代で終わると思われたのだが、その両親は一人の神童を授かった。

ゼロからの反動か、はたまた祖父の思惑通りか。歴代の蒼崎の中でもトップクラスの魔術回路の逸脱性を持つ少女が生まれ、彼女は即座に蒼崎の後継者として教育を受けることになる。

それが蒼崎青子——の、二歳年上の姉、蒼崎栞子である。

青子は魔術回路こそあるものの魔術世界で高い可能性として生を受け、魔術とは無関係に、温かな家庭に愛されて成長していく。

「ラッキー！うちのめんどくさい所は全部姉に押しつけていってワケねー」

なんてノリで日常生活を謳歌していた青子だが、十六歳の誕生日に突如

「んー、やっぱり蒼崎の後継者は青子にする」

と問答無用で魔術師の世界に引きずり込まれ、魔術師見習いとして久遠寺の家に下働きとして修行に出される事に。

以上が『魔法使いの夜』が始まる、ちょっと前の話である。

## 出典／魔法使いの夜（未発表）

三人の主人公による洋館同居もの。複数の人間が洋館に住む、という状況は月姫に、現代に生きる魔術師の戦い、という方向性はTYPE-MOONに見られる。主人公のヒロインの原形。黒桐鮮花、遠野秋葉、遠坂凛の原形。

月姫で登場する青子は彼女が『世界の主役』だった頃から数年後の、先輩・導き手としての姿。ツンデレキャラは、いつしか少年になってお姉さん。月姫キャラに昇華するのであった。ああ、いい話ですね。

天才のように思われているが、あんまり強い魔法の良くないチャンネルが一つあるだけで、その他は平均的な魔術師と言える。







## Introduction

# 久遠寺有珠

現代に隠れ住む魔術師。魔女。永遠の令嬢。孤独で、束縛され、頑なに誇りを守る、時代に取り残された少女。

人間的な感情が乏しく、魔術師としての生き方を絶対としている。日常生活はあくまで「正体を隠して魔術を行う」のが魔女としての在り方だから続けているにすぎない。

青子の友人。青子にとっては魔術の先生にして相棒……だが、有珠にとっての青子も、同じような立ち位置のようだ。

生まれる前から魔女である事を義務づけられていた為、十六歳にして魔術師として完成している。

青子は平均的な高校に通っているが、アリスはお嬢様学園に通っている。ちなみに三人目の同居人は青子と同じ学校なのだが、その件については本人もよく分からない感情があるとかないとか。

基本的には人間嫌い。青子とは立場上仕方なく関わりを持ち、いつのまにか唯一の友人になっていた。

街に棲む魔術師として青子と共に外敵を撃退するが、基本的には父の形見である久遠寺の別荘（青子たちが同居している洋館）に閉じこもり、あまり外には出たがらない。

童話をモチーフにした呪術、薬学を得意とするワンダーランド系の魔女。

## Explanation

# 久遠寺の事情

久遠寺はもともと魔術師の家系ではない。魔術師の血を持っていたのは有珠の母である。

資産家である久遠寺の長男は留学先で一人の魔女と出会った。

彼は彼女を愛し、彼女もその求愛を戸惑いながらも受け入れていたが、同時に恐れもあった。どんなに祝福された結婚でも、生まれてくる娘は魔女だ。彼女がそうであったように、魔女の子供は例外なく一族の血と歴史を受け継ぐ宿命を持っている。

魔女にとって父となる男性は、情を移してはならないもの。お互いを受ければ愛するほど結末は不幸になる。それを承知した上で久遠寺の長男は彼女を娶り、日本に戻って幸せな家庭を築いた。

が、有珠の出産後、母は役目を終えたように死去。父は周囲の反対に耐えながらも娘を深く愛し、数年後に他界。一人になった有珠は両親と暮らした洋館だけを相続し、母と同じように魔女として生きる道を選んだ。

また、蒼崎とは母親が日本に帰化する際に関係を持った。

有珠と檀子は十年以上の付き合いで、青子とはまだ一年だけの共同生活にすぎない。

有珠にとって青子は友人で、檀子は良き理解者といったところ。どちらも仲がよいのだが、蒼崎姉妹の殺し合いのような姉妹喧嘩を止める気はないようだ。

## Source

# 出典／魔法使いの夜（未発表）

お城に自分から閉じこめられたお姫さまの話。三人の同居もの。

有珠は人間的にも性的にも達観者なので一番強いが、在り方として一番弱くもある。

一見青子と同じ「現代の魔術師」に見えて、実は真逆の位置付けの存在。両親の唯一の形見である洋館に執着している。わりと病んで、自傷系。

青子は歳を取るが、アリスは歳を取る事ができない。大切な思い出である洋館に転がり込んだ三人目の同居人を徹底的に無視し、一日でも早く出て行ってもらおうとしていたのだが――





## Introduction

## 旧セイバー&amp;旧主人公

第七階位の新興魔術師・沙条綾香は聖杯戦争と呼ばれる魔術師同士の戦いに巻き込まれ、騒動の末に第階位のサーヴァント・セイバーを召喚し、マスターとして夜を駆ける事となる。

といったお馴染みかつ捻りのない出しから始まる、もう一つのFateのメインキャラクター。

勝ち気で賢く、どこことなく厭世的で中絶して人的綾香と、そんな少女の背伸びっぷりを微笑ましくもシニカルに見守るセイバー、というカップリングだった。

(Fate/stay nightにおける、遠坂凛とアーチャーのコンビを想像して頂ければ分かりやすい)

最強のマスターが最強のサーヴァントを呼び出す、というのが出だしキーワードだったようだ。

当時の伝奇小説の流行に従って、始めと終わりの決めめ、あとはいくら思いつくまま話を続けていく、というスタイルだったのが微笑ましい。

## Explanation

## 旧FateとFateの相違点

旧Fateからキャラクター造形が変わっていないのはランサー、アサシン、キャスター、バーサーカー、アーチャー(キルガメッシュ)、エセ神父と撰殺教師の7名。

ランサーのマスターは綾香のライバルで冥ルヴィア嬢っぽいお嬢様であり、

ライダー(テセウス)のマスターは病院で不治の病に苦しんだ末にどくろに他界なされた女性だったり、

バーサーカーのマスターは伝奇ものに相応しい、倒した相手は即レイ×な外道教師だった。

アーチャーは初登場時から常々キルガメッシュとして登場したり、アサシンは今も昔も山門で

——アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。

などとも名乗りを上げる伊達男だった。

余談だが、エセ神父と撰殺教師はお互い偏見の塊の出で旧知の間柄でした。爆笑。

## Source

## 出典/原作版Fate(未発表)

製作時期は魔法使いの夜よりさらに前になる為、"TMにおける現代の魔術師もの"の雛形と言えるたんに魔術転生がやっていただけ、という話も。

とは言うものの、この素直になれない天才少女と年上の青年、という関係は好きだったらしく、物語がFate/stay nightになっても凛とアーチャーという形で復活を見た。



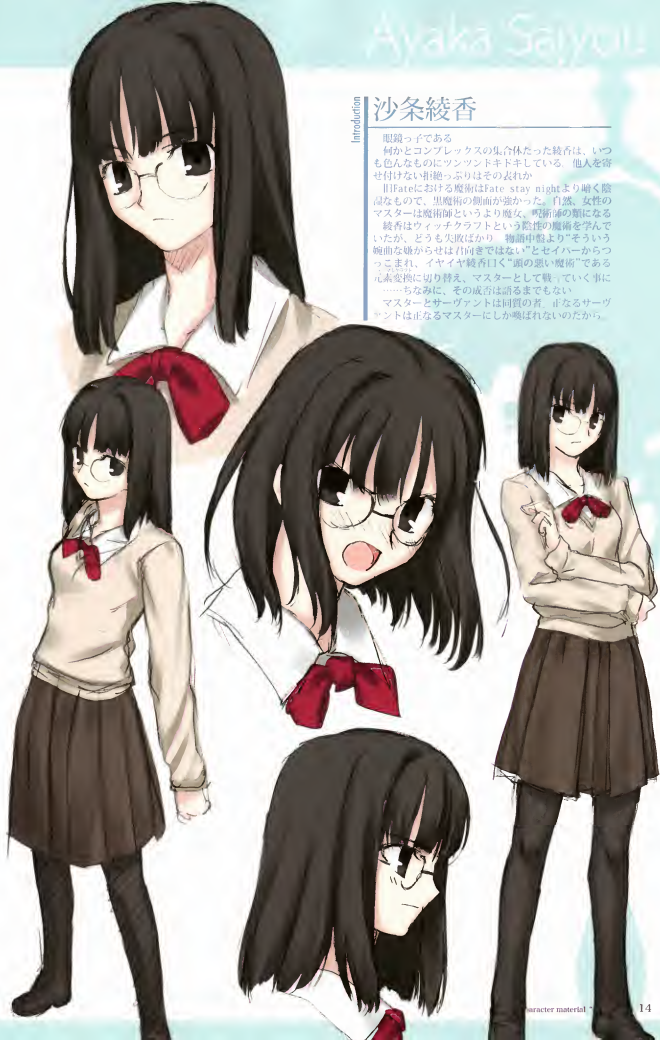
Introduction

## 沙条綾香

眼鏡っ子である  
何かとコンプレックスの集合体だった綾香は、いつも色んなものにツツツンドキドキしている。他人を寄せ付けない引越っふりはその表れか

III Fateにおける魔術はFate stay nightより暗く陰鬱なもので、黒魔術の側面が強かった。自然、女性のマスターは魔術師というより魔女、呪術師の類になる  
綾香はウィッチクラフトという陰性の魔術を学んでいたが、どうも失敗ばかり 物語中盤より“そういう婉曲な嫌からせは右向きではない”とセイバーからつかまれ、イヤイヤ綾香曰く“頭の悪い魔術”である元素変換に切り替え、マスターとして戦っていく事に……ちなみに、その成否は語るまでもない

マスターとサーヴァントは同質の者。正なるサーヴァントは正なるマスターにしか喚ばれないのだから。



Introduction

## 旧セイバー

正体とか宝具とか、ほとんど「セイバー」の面影を留めておいて、違うのは性別くらい。金髪我様のデザインラインはタワーク化した旧セイバーなのだった

物語中盤、アーチャーによって倒され、消滅。バーサーカーのマスターによってブラック化して再び喚ばれるのも、ランサーと仮契約した綾香との戦いの末に正純化し、バーサーカーチームを破ったりした

ちなみに、このエピソードが好きだった原画担当の強い要望でFate stay nightにおける黒セイバーが実現した。セイバーって、言ったら黒でしょう。とは原画担当の弁。うむ、よっぽど黒い（悪い）セイバーを描きたかったのであろう

そしてFate/知識。Fate/stay nightをゲーム化しよう、という話になった時、宝具にはルビが必要だからルビかぶれるスクリプトエンジンを、という事で古里青里という新しいエンジンを使用する事になったとか





## Introduction

## バルトメロイ・ローレイ

魔術協会における中央学院、ロンドンは時計塔が誇る“現代最高峰の魔術師”。時計塔院長補佐。聖歌隊・クロンの大隊を指揮する現魔導元帥。魔術属性は風。

過去、死徒二十七祖を二体撃破し、教会に引き渡したバンパイアハンターでもある。

これといった特異魔術を持たないオールドクスの魔術師だが、個々の能力が最高値である為、あらゆる状況において優秀な成果をあげてきた。

シンプルイズベスト。もともと強ければ特殊能力などいらない、という典型にして完成系。

自身も優れた魔術師だが、ローレイが選び抜いた五十人からなる精鋭の魔術師たちを引き連れ、敵を殲滅する。その姿は楽団を率いる若き帝王そのものだとか。

ローレイの背後に控える隊員たちも一流の魔術師たちだが、彼らがおらずとも、ローレイ単体で二十七祖レベルの死徒と真っ向勝負ができるのだとか。

## Explanation

## 覚書

ロンドン魔術協会における支配階級、ロードの一人。魔術協会でも古い血筋の家柄ではあるが、その起源も、後継の様式も明かではない。同じくロードであるアーチボルト家とのみ多少の交友がある程度。

家名であるバルトメロイという銘記すら由来は不明。

時計塔創設時に現れ、その強大な“真い魔術回路”を以てロードとなり、以後、何百年と頂点に君臨してきた一統。

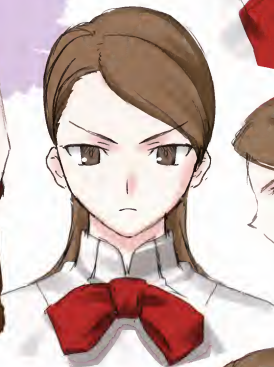
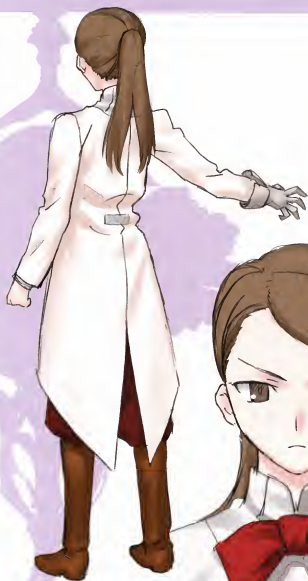
今日の当主であるローレイも、その名は当主となった後に付けられた程度のもの。彼らにとっては“バルトメロイ”という響きこそが名前と呼べるもののだろう。

代々完璧主義なのか、バルトメロイの当主は魔術師として完成するまで人前には現れず、バルトメロイの館内でのみ待つ。未熟なまま外界に出るのは何よりの恥であるらしい。結果、魔術協会に足を踏み入れる時は、その時点で一部門の総帥となっている。

ある意味二十七祖より強烈な貴族主義者で、同じロードたちですらより尊く優れた血に服従するべきと考えている。バルトメロイの当主が自分たちと対等と見る魔術師は第一魔法の具現者のみだ。

二十七祖の王、白翼公オーテンロッゼに並ならぬ執着を持ち、白翼公が何十年とかけて用意してきたアルズベリの儀式を阻止する実行部隊に参列する。

事前に妨害工作をしなかったのは白翼公を誘き出し、儀式中にこれを阻止し、無念の声をあげる吸血鬼どもの無様を見るためだ。



Source

## 出典/the dark six(仮名)

魔術協会におけるアルズベリ監察連盟のリーダー……なのだが、貴族主義がいすぎて他の魔術師たちと協力する事がない為、リーダーでありながら孤立している困ったちゃん。

特殊な成長過程を送った為、家庭的なものに興味、面白くない。

本人自身、“その人間の人格より、その特性を評価する”という主義なので、強力な特殊能力を持つ人間にはそれなりに関心を持つ。

徹底した貴族主義なこの人物は、しかし、自分たちのみが貴い血族と信じているが故に、他の貴族たちなどどうでもいいのだ。

ローレイイにとっては労働階級も支配階級も同じもの。その中で特筆すべき物があるとすれば、それは生まれではなく授けられた個別の能力だろう、という事らしい。

典型的な、とことん人間性を排したお嬢さまキャラとして登場。……今のところ、メインヒロインの一人として考えられているとかいらないとか……。



## Prelude I

0.

死徒ルヴァレ。

ノルウェイの霧に潜む、齢五百年を超える吸血鬼。

空席となった二十七祖、その十位をじき受け継ごうという大貴族。

生け贄の血を搾取し続けた事、およそ五千命。感染による被害の拡大を入れればその数倍。親族の質も数も、重ねてきた外道魔道も、超越者の中の超越者を名乗るに相応しい不死の怪物。その一門の中樞が、この、朱月に照らされた古城だった。

通常、彼ら死徒の根城は人に発見できるものではない。闇に影に、良識への憧れ、禁忌への畏れによって覆われた彼らの魔城は、招かれた者にしか姿を現さないからだ。

幾重もの結界、強大な魔力によって隠された聖域。自然すら欺く不可視の守りは、妖精たちの住む異界に近い。

死徒ルヴァレの城として例外ではない。この湖は祖の魔城には及ばないものの、幾度となく異端討伐の軍勢をかわしてきたまやかしの城。決して脅かされる事のない不滅の証だ。

五百の年月そうであつたように、それは、これからも変わらぬ繁栄と城主は信じて疑わない。

——滑稽にも。

彼女の率いる大隊が、その歴史を無に帰すこの夜まで。

### ／死徒【用語】

Explanation

吸血種の大部分をしめるモノ。一般的な吸血鬼のイメージ。

元々は真祖が用意した緊急用の食事にすぎない。真祖は自らの吸血衝動を抑えきれなくなった時の為に、あらかじめ生きた血袋を用意しておいたのである。

この、真祖に血を吸われ、下腹と化したモノを死徒と呼ぶ。

中には真祖の手ではなく、魔導研究の末に不完全な不老不死（吸血鬼）になった者もいる。彼らは死徒たちの悪い社会に参加する事で、発端は違えど同じ吸血種として認識しよう。



1.

幾つもの人影が、湖に浮かぶ古城を取り囲む。

数にして五十。この魔境にそれだけの人間が現れた事はこれが最初であり、最後だった。

「右翼三隊、結界基盤に侵入せよ。左翼指揮補佐、城内の索敵終了。各自、魔術回路の秒針を合わせろ。10、6、3、0、状況完了。」よし。副官に定刻通りと伝令を。

湖を包囲した魔術師達には一糸の乱れもない。その在り方は魔術師というより軍隊のそれだ。自己を排した無個性な集団。その実、その全てが協会において一部門を任されるだけの魔術師である。

故に、その名をクロンの大隊。

五十の数で大隊を名乗るのは誇称ではなく、むしろ謙虚に通じると言うものだろう。

「湖一帯の荷式を掌握いたしました。結界の迎相には半刻土地ごとの消去をお望みなら、一時間ほどで開始できますが」

大隊を束ねる副官が、傍らの少女に指示を求める。

完璧な勝利か、徹底した殲滅か。

城に進行し闇に潜む吸血鬼どもを一匹残らず消し去るか、それとも、戦闘など行わず、この土地ごと一切を無に帰すか。

結果は同じであるが、より確実なのは後者だ。古城を取り囲み、優れた陣形を組み上げたところで敵は百年単位の吸血鬼

万が一にも獲り逃す事もある。

やややりすぎのきらいはあるが、ここで土地ごと地図から抹

消してしまう方が大隊の方針に添おう。この城を発見するまで

数年を費やしたのだ。ここで吸血鬼どもの頭を逃し、次なる隠

れ家へ逃げ込まれては意味がない。それを、

「どちらもあり得ません。恥を知りなさい、副官」

少女は、一言に切り捨てた。

2.

そのような愚考、思慮する事さえあるまじき行いだ。これは異端討伐ではない。威光を示す為の巡礼なり。いかに力をつけよう、相ですらない吸血鬼に従者を使うなどしての外。衰えぬ虫一匹ならばこそ、少女自らが慈悲をもって踏み潰さなくてはどうか。

「始めます。貴方たちは城壁の警備を、決して、一頭も逃さぬように」

「バルトメロイお一人で……？　しかし、それは」大隊の魔術師たちは少女に絶対の信用を置いている。彼女の技量ならばルヴァレの一族、その全てを溜息まじりで殲滅できると理解している。

だが、その事実と殲滅の方法は別の話だ。

大隊は常に効率的な運営を良しとする。少女一人では半刻ほど、しかし大隊でかればその半分で事足りよう。戦闘とは、その過程においても勝利していなければならぬ。というのがバルトメロイの不文律ではなかったか。

「間違えぬように。これは訓練や、ましては戦いなどではありません」

大隊を湖に残し、少女は湖面を歩いていく。

数百年、ただの一人も人間を通さなかった城門を、腕の一揮で破壊する。

「時には戦えるのも我らが務め。狩りは優雅に、愉しみながら行ってもいいです」

肩一つ動かさず。その瞳に冷たい憎悪を宿して、少女は侵攻を開始した。

時計塔には、一人の若き女王がいる。

名門バルトメロイの今代当主。魔法に至らぬとしても、魔術だけで奇跡一指をかける才能の結晶。魔術回路のみならず学長す

## ／死徒ルヴァレ【人名・使徒】

闇の死徒。使徒の中でも特に卑劣な歴史を持つ古い死徒。ルヴァレ自身は雙眼目的で真組に染み上げられた「美しい」だけの人間であったが、超能力はない。数百年前、教会の代行者によって誰に迫り込まれ死滅したものとされていたが、神秘的な生還を果たす。

以後はそれまで所心を持たなかった「親戚」作りに傾倒し、死徒最大の犯罪者でも白賢公の傘下となった。

ら凌駕すると言われる、いと気高きローレイ。  
文字通り時計塔の頂点に君臨する彼女には、しかし、拭いがたい悪癖があった。

否、これは彼女ではなく、バルトメロイの宿病と言うべきか。

理由は敵意は人間としての尊厳か、貴族としての誇りからか。バルトメロイの当主たちは率先して死徒の討伐を行い、その習わしに添うように、少女も吸血鬼の殲滅に時間を割いた。

誰よりも病的に。時に院長補佐の貴族を蔑ろにしてまで吸血鬼――死徒と区分される吸血種たちを滅ぼしてきた。

少女自身、理由の分からない憎悪から。

それは歴代のバルトメロイ当主に勝る執着であり、彼女自身、制御のできない感情だった。

城の本館。たまたま追いつめた十八頭目の獲物が、死徒ルヴァレと呼ばれるモノだった。

一連の展開は、今までの難題に比べればようやく、戯れになったと言えたらう。戦闘と呼べるものではなかったが、とりあえず退屈はしなかったのだから。

「無様な、わざわざ赤月まで待つてこの程度か。所詮人蛇。五百年、無為に過ごしてきたのですわ」

死徒にとって月の赤い夜は絶世を迎える時だ。吸血鬼退治に特化した教会の代行者たちも、赤月での戦いは行わない。

その禁忌を破り、なお蹂躞するがバルトメロイ。

現代最高峰の魔術師、単身で二十七の祖各々に匹敵する聖女である。

「うむ？」

その聖女の鞭が、わずかに迷う。城の上階から強い魔力を感じたのだ。それは目前の死徒と同じものであり、より強力な吸血鬼の気配だった。

「お、お助けを、お父さま――」

その一瞬の間に、少女は死徒の逃走を許してしまった。

瀬死とは言え百年単位の死徒。それ程度の底力を見せたらしい。

「……無礼な。私から、逃げるなんて」

不愉快げにこぼしながら、少女はあくまで優雅に、狂走する死徒より早く廊下を歩いていく。

その唇は、先ほどより少しだけ、楽しみに歪んでいた。

1 2.

同刻。

「我々より先に、城に入った者がいると？」

大隊を少女より任された副官は、信じがたい報告を受けていた。

「事実か。事実だろうな。侵入経路はなんだ。ルヴァレの馬の臓？ 奴らの馬車に潜んでいたと？」

侵入者とはやは、城に招かれたルヴァレの血族たちに紛れて侵入したらしい。馬車を牽く馬のはらわたに身を隠して、よくある手法が、死徒の馬ならば獣と言え魔物。それを制する時点で、まっとうな人間ではあるまい。

「……しかし、その方法では中に入った時点で人間だと気付かれる。バルトメロイ城まで動きがなかった以上、ルヴァレは侵入者に気付いていなかった筈。と、なんと――」

その侵入者は、死徒と同種に見るべきだ。魔術師や代行者でない。人間である以上、吸血鬼の鼻は認識化せないのであるから、つまり――この侵入者は、単独であり、死徒でありながらルヴァレに敵対する者である。その条件に合う「死徒」は、たしかに一騎、存在する。

## Explanation

### ／死徒二十七祖【用語】

死徒たちの大元である二十七の祖の事。現在では半数の祖が教会によって封じられている。

最も古い死徒たちの事で、中には既に消滅している祖もいる。二十七の祖が今以て不滅であるのは、消滅した祖の配下であった死徒がその座を受け継いでいる為。

封印中の祖は聖堂教会の館に収められているが、彼らでは滅ぼされまいが、半ば永久監獄となっている。祖が封印された瞬間は今も健在であり、祖の希冀、あるいは消滅の為に力をつけていると噂。

「ルトメモロイに報告を。城の関人者は死徒……二十七組の一人となる可能性が高いと」

少女の力量ならば、既に他の客がいる事など察していよう。だがその正体は遭遇するまでは判明まい。出来ないのではなく、あの少女は素敵や調査といった頭事を好まないのだ。

「どうした、不思議ではあるまい。ルヴァレは空席となった十位を離れようという死徒、祖のいずれかが訪れる事もあるう。報告を待つ。戦れが過ぎると、ルトメモロイに火が入るぞ」

しかし、どうも、報告はそれだけではいらし。

魔術師はいつその首をかしげながら、

「それが……もう一つ、おかしい事が」

大隊の一員にあるまじき間の抜けた台詞で、たつた今見てきた、見た事もない魔術の痕跡を報告した。

### 3.

城の上階。死徒を追いつめた寢室で、少女は一人の悪鬼と遭遇した。

「長剣と長銃を携えた、いまだ人間の匂いを残す、血に痴れた吸血鬼に」

「O、ち、父上……！」

黒い吸血鬼の前には、半身を断たれ撃ち抜かれた死徒の姿。男女の違いはあれ、それが先ほだ自分が追いつめた使徒と同じモノだと認めた瞬間、

「風よ……！」

少女と黒い吸血鬼は、互いが、この城における最強の敵と認識した。

咆哮をあげるが如く回転する少女の魔術回路。怨嗟をまき散らしながら振るわれる黒い長剣。

古城を切り取る真空の魔術。弾かれながらも、狂風を刀身で飲み込む悪鬼。次いで、響き渡る四連射。

迫る魔弾を、白銀の輝きで防ぐミズルの聖外套。

攻防は一瞬。

交差した一撃の威力は城壁崩しに匹敵する。寢室は少女の魔術の一難によって切り取られ、テラスと化した。

「……魔術師か」

カシン。黒い吸血鬼は手首のスナップだけで長銃の弾倉を開き、排射し、魔術を次の形態に移行させる。少女ですら肩をひそめる呪いに身を浸しながら、黒い吸血鬼の眼光は理知としたヒトのソレだ。

否、むしろ怨嗟こそが我が理性と。

怨嗟がなければ正気ではいらぬその姿は、まさに、復讐鬼の名が相応しい。

「エンハウンス。死徒殺しの吸血鬼」

その噂が広がりはしたのはいづれ最近の事だ。死徒を殺す死徒がいる。死徒同士、戦いは珍しい事ではない。彼らは支配圏の塗り替え、戦いの勢力争いを娯楽としている。死徒が死徒を倒す事は彼らにとつては悪ではない。滅ぼし、滅ぼされたところで吸血鬼の数に変化はないのだから。

だが目前の男は別だ。

コレは吸血鬼そのものを滅ぼす。頭を潰し、血族を皆殺しにし、領地をすべて焼き滅ぼす。

その在り方は少女や代行者たちに近い。死徒にとって、死徒を滅ぼす。為の闘争を行う者は、彼らにとつても度し難い異切りなのである。

それがこの悪鬼、死徒エンハウンス。二十七組の一人として現れた、主殺しの復讐騎。……一番乗りだと思っていたが、私は二番手だったのか」

## ／魔術協会【組織名】

国際・ジャンルを問わず、魔術を学ぶ者たちによって作られた自衛団体。（無論、名目上ではある）

魔術を管理し、監視し、その発展を使命とする。

自らを脅かすモノたちから身を守る為に武力を持ち、魔術の更なる発展の為の研究機関を持ち、魔術による犯罪を防止する為の法律を敷く。

現在、協会の中心地はロンドンとされている。

だが。その魔物すら、少女を恐れさせるには至らない。エンハウスの力は分かった。それなりに強力だが少女には及ぶまい。せいぜいルヴァレの二倍強。二十七祖たちが持つ超能力もない。その程度の平凡さでは苛立ちすら浮かばれない。少女の腕に纏るものがあるとすれば、それは、一番乗りが自分ではなかったという点のみだ。

「いえ、それは許します。今回はほぼ同着。私の前に出なかった事を感謝しなさい、吸血鬼」

「……」

黒影は答えず、先ほどまで追いつめていた使徒を捜す。巻き込まれて四散したか、運良く逃げ延びたか。

答えは、云々しくも後者だった。

「逃げ足だけは一流のようですね。——こうして、詰めの前に、野良犬の助けがあったとしても」

少女の機軸はどうに変更されている。

闇入を許した。だが持りの邪魔を許す気はない。少女は魔眼に火を灯し、目前の吸血鬼に照準を合わせ、

「——奴らは、親子だ」

黒い吸血鬼の言葉を、一瞬で理解した。

両者、弾け合うように走り出す。

少女は死徒が逃げ出した先、尖塔に続く回廊へ。

黒影は吸血鬼らしく、外壁を這う蜘蛛のように尖塔へ。

その決断の早さ、的確さ。少女には強者の誇りと慢心と、それらを切って捨てた冷徹さがある。

奴らは親子だ、という言葉の意味。

死徒ルヴァレは既に後継者を選んでいた。

少女が追いつめたルヴァレは娘であり、黒い吸血鬼が追いつめていたルヴァレは息子だったのだ。

一人一では取るに足りないものも纏ける。奴らは力を分け与えられたばかりの幼子。真に狩るべきはその父であり、同時に

彼ら親子が揃えば、わずかではあるが、今の少女の戦力に

迫る。

血分けをした死徒の力は足し算ではなく掛け算だ。今は復讐騎より死徒ルヴァレの消滅が優先される。

だが間に合うまい。

少女は狩りが戦いになった事を受け入れながら、元凶の潜む尖塔に踏み込んだ。

そこには、やはり。

「……、え？」

寄り添うように、眠るように。

一切の出血もなくバラバラに死に絶えた、無惨な、三人の使徒の亡骸があった。

Zero.

「今夜、死神が現れる。」

親祖ルヴァレの元に予言が届いたのは、バルトメロイが現れる三時間前の事だった。

殺し合い、消滅を繰り返す二十七祖が今も健在な理由。それは予言者の役割をもった祖がおり、彼女が常に死徒たちに死を予告し、すみやかに後継者を作らせている為だと言う。

その予言を前にして、ルヴァレは笑った。

なるほど、先ほどから湖をうろついているバルトメロイの魔術師ともは確かに油断ならない。風向きが悪ければ滅びるのは自分達だろう。だが絶対に回避できない死ではない。噂に聞く

驚微の予言も的はずれと言わざるえない。

ルヴァレは愛すべき息子達にもてなしの準備をさせ、この尖塔で自らの隠匿物を開封する。

ルヴァレとして、自身が二十七祖に足る器とは思っていない。

## ／エンハウス【人名・死徒】

Explanation

復讐騎。死徒二十七祖の一人。18位。

エンハウス、リード（片刃）と蔑まれる。祖に成ったばかりの吸血鬼。

死徒と死徒が敵対する事は珍しくはないが、それはグループ内でのみの権力争いを意味する。王である祖の後継者を目指す戦いで、他の宗閥（他の二十七祖）と争う事はない。が、エンハウスはその規律を破り、他の二十七祖のものを得ようとしている。

祖と名乗るにはあと二百年は必要だ。その二百年を埋める為に、彼は魔術師とやら魔術礼装、概念武装を奪いに奪ったのだ。その成果、彼のコレクター、悪魔使いメレム・ソロモンですら羨むこの遺物を駆使すれば、あの程度の小娘はたやすく返り討ちにできよう。

「ほう、取り囲んだかと思えば、小娘にも単独入城か。慢心で命拾いしたバルトメロイ。結界崩しをかけておれば、逆に貴族らが地の底に落ちていたぞ？」

親祖ルヴァレは、笑しげに少女の入城を眺め、ふと、頬に当たる風に気を遣らした。

この、完璧な密室に、風。

刹那、些細な疑問を追い抜くかの超速度で跳び退いたのは、若輩ながらも大貴族の名に恥じぬ才気と言える。

そうして、床に着地した後、彼はずりりと、腰元からスライ

ドした。

「な」

落ちる。落ちる。落ちる。

驚愕で死にかける。傷がまったく癒がらないという、人間だった頃の感覚に驚いた。

いや、懐かしんだというべきか。

おどましくも素晴らしい、人でなくなった時の記憶に似て、

切断された箇所は、先遣に「死、んでいた。

突然と見上げる。傷つかず崩れないハズの天井に、ぼつかりと穴が空いている。

目眩むような赤い月。

部屋には、何の変わりもないナイフと、顔を覆う包帯と、初見でありながらもコレがそうなのだとはつきりと分かる、静かな死神の姿があった。

4 ↓ 5

静まりかえった尖塔の部屋。

少女が踏み込んだ時、既に事は済んでいた。

親祖ルヴァレと子供たちの亡骸。

無言で佇む黒い吸血鬼。

そして、自分も気付かず、屈辱で歯を鳴らすという、バルトメロイにあるまじき己の姿。

「……目的は、ルヴァレの持っていた鉄箱か」

黒い吸血鬼が呟く。

少女ははしたなくも、ぎり、と右手の人差し指を噛んだ。それはひとえに、耳障りな歯鳴りを止める為と――

「去れ。今は見逃してやる、吸血鬼」

言われるまでもない。

黒影は天井に開いた穴へ跳び上がり、鳥とも虫の足ともつかない無様な羽を生やして消えさった。

……一人残された惨殺空間。

革手袋に、じわりと血が滲んでいく。

恥辱で気を失いかねない。そう、一番乗りを気取っていがかり、自分は二番手ですらなかつたのだ。まさしく、狩りでもなく戦いでもなく、此度の儀は退化の類。

「……必ず見つけ出します。その時こそ、姿さえ見せず勝ち抜けた貴君に、心からの賞賛と」

この血と痛みに値する報復を与えましょう、と。

少女――バルトメロイ・ローレイは、未だ出会ってもない何者かに歌いあげた。

## ／DEATH[???]

Explanation

暗殺者。切れぬ苦のものを、バタナイフを入れるかのように切り裂く。不滅である死証をたやすく解体する。文字通り死神の如き影。

復讐顧問様、死証社会において鳴にりだした神出鬼没の災禍。

……しかし、大した報酬もなく百へ束へ、ホントに働き者だこと。



## Introduction

## 蒼崎橙子

蒼崎が生んだ天才。

数こそ平均的だが精密さで他を圧倒する美しい魔術回路、生まれつき宿っていた魔眼、世界の機微を感じ取る五感、自らの特異性を削る事なく摂理に適合する知性、と非の打ちどころのない才能の塊。

他の魔術師たちのように現代社会に寄り添う必要はない、と育てられた純粋培養の「魔法使いの卵」である。

純粋に『魔術師』の逸材として協会も注目していたが、彼らにとってみればそんな才能より魔法使いの跡取り、という事実の方が大きかった。

略十歳にして多くの名門魔術師たちが訪れ、これを当然のように受け流した橙子の姿に、ついに本物が現れた、とますます将来を期待された。

が、それほどの風説が流れていても、近い将来同僚となるであろう他の魔法使いたちは、一人も彼女の前には現れなかった。

……その意味を薄々感づきながらも、決定的な答えが突きつけられる刻まで、彼女は「周囲が望む」天才で在り続ける。

## Explanation

## 蒼崎橙子の事情

魔法使いの跡継ぎとして育てられている為、両親、妹とは離れて暮らしている。(両親の家には青子、山奥にある祖父の工房に柑子)

なので、十八歳まで学校に行った事が無い。  
妹の青子とはちよくちよく会って話をしていたが、基本的には世間を知らない天才少女、という在り方。  
世捨て人っぽいところはなく、有り余る魔術の才能、あの祖父の元で暮らしている、という条件でありながら、落ち着いたあるいいお姉さんだったりする。

青子のどうでもいい失敗談を聞いては真剣にアドバイスをしたり慰めてあげたりも。

(ああ、なんて微笑ましい姉妹なんだろう！)

蒼崎の魔法を受け継ぐ為、大魔術の起動に偏った教育・修練を積んでいる。

本人はもっと細やかな、世界を動かすものではなく世界に残るものを作り上げる事が好きらしいのだが、それは我慢しているとか。

特別な子供である橙子から見ても「怪物」である祖父を恐れながらも尊敬している。

反面、一般人として気ままに生きている妹の青子には複雑な姉妹愛を持っているのだが……。

十五歳をすぎた頃から、祖父の期待に応えようとするあまり視力が落ち始めている。せつかくの魔眼だが魔法に比べれば取るに足らないもので、視力の低下は秘密にしているようだ。

## Explanation 02

## この後

色々あって蒼崎の家と縁を切る。

(人為的な二重人格者になるのはこの時)

その後、修業時代に知り合った魔術師たちを頼ってロンドンの魔術協会に入籍。代償に多くの負債を持つ事になるが、二年であっさり返却。

さらに数年後、希代の人形師として大成し封印指定を賜り、すぐさま工房を引き払って協会から行方を眩ました。

妹同様、一つの場所に留まらない人なのだった。



Source

# 出典／空の境界、魔法使いの夜(未発表)

空の境界に登場する蒼崎橙子はこれより十年ほど経った後の、二十代後半の姿である。

行方を眩まして自堕落に暮らしていたとさる、御人鬼と一般人などと言うけつたいな二人組と縁がある。これまた過去の因縁と出会ったりする。

余談ではあるが、『魔法使いの夜』の最後で大きな災いを受けてしまい、以後は解呪するまで動けず動かない体になっている。青子と有珠さんマンが救出。





## Introduction

### 洗脳探偵

人知を超えた難事件と共に現れる、さすらいの名探偵。密室探偵とも呼ばれる。メイドという概念が失われた絶望世界・トオノシティの住人。

口数は少なく、無愛想、鉄面皮。  
解決率100%でありながら、加害者はおろか被害者にも恐れられる冷酷な法の執行人。……ある意味怪人そのものだが、さもありなん。狂った運逆を制するのは、狂った正義のみなのだから。

深い青色の眼はあらゆる隠し事を看抜き、冷酷な一語はどのような言い逃れも許さない。

「推理に完璧です」「アリバイから動機です」等々、妙に説得力のあるキメ台詞で多くの犯罪者たちを打ち破ってきた。

行方不明の姉を捜し出して捕らえるため、今日もトオノシティの夜を駆ける。

## Explanation

### 特殊能力：ロックドールム・ディティクティブ

“お部屋をお連れします”の囁きと共に巻き起こる怪異現象。

密室探偵は密室専門の探偵、という意味ではない。密室で事件を解決する探偵、という意味である。

洗脳探偵は目を付けられた、じゃなくて、選抜された容疑者は気が付くと密室の中におり、洗脳探偵と二人きりになってしまう。

その数分後。

密室から出てきた容疑者は人が変わったように犯行を認め、かくて事件は解決するのであった。

……洗脳探偵の冷酷かつ鮮やかな推理はぜひ拝聴したいところではあるが、残念ながら密室の中何が行われているか知るよしはない。

## Explanation 02

### キャラ属性

勘違いされがちだが魔法少女ではない。どちらかというと夜の街に現れるダークヒーロー的な立ち位置。

精神改革、虚言訂正、自供強制がメインスキル。

実にクールな性格で、ロックドールム・ディティクティブ中は椅子に腰をかけ、理の支配者の如き姿を見せるとか。

探偵を続けているのは、それが姉を見つけるのに一番早い方法だからとか。

言うまでもないが、その正体は誰も知らない。

## Source

### 出典／月姫

……あんまり説明したくないが、月姫のヒロインの一人・翡翠の可能性の一つ。作者たちの意図とは無関係なところから発生した、誤字と脱字が生み出したアヴァターと言えよう。

月姫格闘『MELTY BLOOD』の翡翠のラストアークで、この力的一端が見られます。

はい——貴方を、犯人です。





Introduction

## 少女

投影。天使の幻想。  
ギターを弾きます。へたくそです。  
稼ぎの少ないゴドーのアパートメントに現れ、お手伝いと称して居候する遠距離トラブル型スタンドちゃん。

基本的に、いるだけで何もしてくれません。  
特殊能力は微妙な癒し効果。得意技はゴドーの給料を食いつぶすこと。趣味は大樹の下に集まった人々の人生鑑賞。

やっぱりバーチャルに恋しちゃダメだよなあ、とみんな思いつつも、やっぱりバーチャルってのは恋する為に作られるんだ、というお話。

Explanation

## 世界樹の街

タイプ・ヴィーナスの死骸を監視する為に作られた墓地。

当時はこの土地に配属される者は鳥流し同然であったが、亡骸が地上を緑化させている事が判明し、徐々に街として成長していった。

タイプ・ウラムス&ネプチューン射出作戦において、大樹の葉はその大部分を失う事になる。

Explanation 02

## 天の亡骸(タイプ・ヴィーナス)

金星のアルテミット・ワン。  
全長約千メートルほどの動食植物。一対の巨大な大樹を背にした魚のようなフォルムらしいが、雲海の中に隠れていた為、正確に記録した者はいない。

他のアリストテレスたちの侵攻にやや遅れるかたちで地球に飛来、長く雲海の中を漂っていた。

しばらく無害であったが理想的な苗床を探索・選定を終了し、ついに降下を開始する。

その正体は大地に根を生やし、何億という胞子(天使型の捕食端末)をまき散らす侵略型環境育生林床植物。生きたまま地表に下ろした時点で、現生生態系の終焉を意味する。

……寄生型であった為に人間種の概念をも「摂取」してしまったアリストテレス。

Source

## 出典／notes. (月姫読本に収録)

健気で一途で天然な、恋に恋する××××××××。  
入力されたコマンドは地球捕食、けど発生した答えは地上の生き物みんな大好き、というどうしようもないものであった。

ああ。不治なもの、汝が名は愛情なり。



Introduction

## ゴドー

本名消滅。敵対、偽善という通り名で知られる。荒廃した世界に残った、数少ない旧時代の“人間”。

生物としての生命がなくなったが生命としては残った人間は世界終末によって大部分が死滅し、残った者たちも大気に満ちたジンに適応できず死に絶えていった。そんな終末の中でも生き延びようとした人間たちによる人工楽園の出身。

人工楽園自体は黒いアリストテレスによってすみやかに消滅したが、環境適応処置を受けていたゴドーは不運にも生き延び、地上に残った最後の人間として生きていくことになる。

もともと、生き残ったところで先は長くない。ゴドーにとって今の生活は月に住んでいるようなもの。機械と薬の助けがなくては満足に呼吸もできず、口にする食料は毒でしかない。

まさにお先真っ暗ではあるが、幾度もの終末を乗り越えてしまったのか、自虐的ではあるが悲観的にはならない、といった達観（諦観とも言う）に至っているのが日々のんびりと過ごしている。

かつては復讐心から封印区アトリアよりブラックバレルを発掘し、タイプ・ウィークス降下阻止作戦に参加、以後は戦いを避けて行方を見失った。

風の噂ではとある街で行われたタイプ・サターン迎撃戦に参加し、戦死したとされる。

最弱ではあるが、最強の毒に耐える超撃手。

Explanation

## ブラックバレル

黒い銃身。第五架空要素を自壊させる、第五真説要素によって作られた兵器。

六人姉妹たちには天寿の概念武装と呼ばれる。

この銃によって放たれた弾丸は、真エーデルによって活動するものなら、いかなる能力値をも無視して傷を与える魔の一撃となる。

直接肉体に打ち込まれる癌細胞のようなものか。人間が重傷から転落した理由の一つに、大気に満ちたジンを扱えず、吸い込めば死に至るという事がある。

ジンという新しいエネルギーに拒絶された時点で人間はもっとも弱い生物になったが、ブラックバレルはその欠点を逆転させた兵器と言える。

汎用性が高く、各種オプションを換装する事で狙撃銃としても使用可能。

基本は曲銃床を用いるライフル型。

発射時にはオリジナルとレプリカの二丁があったらしい。ゴドーが愛用していたのはオリジナルの方。

## 出典／notes. (月姫読本に収録)

鋼の大地から、天使にまつわる話を切り取ったエピソードの主旨。

最弱だが最強を貶める一手を持つ、という実に主人公チックな人物。

のちに、この芸風は月姫の志願に受け継がれる事になった……ような、そうでないような。

Source

# 魔剣・斬撃皇帝

アド・エデムの持つ魔剣。星を食うもの。  
対象の大きさに合わせて刀身を増大させるだけの単純な魔剣。

エデムが手にした剣種から芽吹き、巨人・増殖を思考の速度で行っている。

しかし、いかにリミテッドを利用した魔剣と言えど、これだけの巨大質量を構成するには莫大な変換源が必要となる。

エデムの魔剣は増大すれば増大するほど、同時に大地を削り取ってしまう。資源を得る為に大地を流土させていった旧世界の方法と何ら変わらないエデムの魔剣は、人間を守る為にも自らを滅ぼすという人間の在り方の具現と言えろ。

魔剣構造の暗黒魔石状態で待機し、エデムが叫びに呼応して大地は全剣ざり、滅びながら強く成長する。

国はその通常の領域拡張。古いオーラに見えるものは刀身の放つジンで消える。刀身によって空から空。荒廃した世界の「から」を切り裂いて闇を照らし出す。斬撃皇帝の隠微となる。



Explanation

## アド・エデム

魔剣・斬撃皇帝を構成する騎士。  
亜麗百種との戦いでは目立たない騎士だったが、アリストテレス飛来を期に表舞台に台頭。  
その魔剣をもって“黒いアリストテレス”を一撃のもとに両断した。  
以後、そのあまりに逸脱した魔剣の為、亜麗百種、人間種、騎士たちによって大断層に作られた魔棄場“魔女の大傘”に幽閉された。  
……アリストテレスとの戦いが終わりに近づく頃、人類サイドの切り札として投入され、舞攻不落と言われた“十字架”を消滅させるも、以降の生死は不明。

えている”というのはデザイン担当のPFALZ氏のアイディア。げ、原作サイドでさえ忘れていた“赤い空”をこう使うとは……！



Explanation 02

## 魔女の大傘 【ウィッチ・スウィフト・アンブレラ】

大断層のただ中に建てられた城。  
名の由来は、開いた傘を逆さにしたような足場に創られている。  
月姫でいうところの千年城の元ネタ。城のカタチをした牢獄で、数多の城壁と幾重もの扉、千の鎖で玉座に座るモノを縛り付ける。  
城壁から玉座に向けて、それこそ蜘蛛の巣のように鎖が伸びており、玉座から立ち上がるには城の全てを破壊するだけの力が必要とされる。  
その他、玉座まで通る為には七十八の扉があり、これまた並の騎士では打ち壊せない“魔法の扉”であるとかないとか。

Explanation 03

## 大断層

亜麗百種の盟主、六人姉妹の末妹が作り上げた、世界を二分する大地の亀裂。  
六人姉妹も好きで創ったワケではなく、騎士たちによって殺された末妹の断末魔がそのまま星を抉ってしまったにすぎない。  
ちなみに鋼の大地において“魔術”は失われているが、六人姉妹はそれぞれ“本当の魔法使い”であったらしい。

Explanation 04

## 騎士

荒廃した地上でも生きていけるように適応・進化した新人類を人間種と呼ぶが、その中でもより人型の生物として進化したもの。  
誕生時から体外にもう一つの器官を持ち、いずれこれをジンによって物質化するに至る。彼らがジンによって物質化させたものを総じて魔剣と呼び、これを扱う者を騎士と呼ぶ。

Source

## 出典／鋼の大地(over count 1999) (月姫読本に収録)

人類滅亡後の、新人類と星の戦いを描いた物語。ジャンルはエッセイ。  
環境に適合した新人類と、人類によって創られた次世代の生態系・亜麗百種との戦いを描いた御伽草子。  
死した星の上で、次なる霊長の座をかけて楽しく仲良く内ゲバしていたのだが、おまえたちどっちもそろそろ死になさいよ、とばかりに謎の物体・アリストテレスたちが宇宙からやってきたのであった……。  
……こうまとめるとなんとおもしろくない話である。  
各惑星の最強種であるアルテミット・ワン（アリストテレス）は、以後、TYPE-MOONのゲームにちょくちょく出てくることになる。  
また、余談ではあるが“赤い空を裂いて青い空が見





# KINOPEDIA

## 白き月姫ファンタズムーン



### ーファンタズムーンとは

とある市限定で製作・放映されたカルトな魔法少女アニメ。なんでもその市で起きた実話を元としているとの事。番組は微妙な人気のまま終了したが、「……三話の敵幹部の扱いに納得がいきません」とスポンサーが続編の製作に着手。スタッフを倍増し、第一期でしきりに組み込まれていた社会的メタファーを極力避け、子供向け作品として再スタートした「白き月姫ファンタズムーン・エクリプス」がある。

エクリプスにはアクション指導に謎のインド人マドモアゼル・カー、演出・料理提供にミスター陣、声優の出演料交渉係としてグル目メイドも加わり、スケールは大幅にアップ。派手なアクションとファンタズムーンの天然爛漫さといきつくところまでいった感があり、子供たちに大ヒットしてしまった。

(※1……後に冬木市で起きた『世直し魔法少女連続ニート暴行事件』はこの番組に影響された少女による犯行とされている)  
また、ヒロインも含めて女性キャラがいっさい出てこない異色の十一話、二十六話、三十五話の脚本はいっつも押されぬ人気作家アキーラ・セオによるものである。

### 放映スケジュール

白き月姫ファンタズムーン

2002年4月1日 - 2002年6月17日 全12話

白き月姫ファンタズムーン・エクリプス

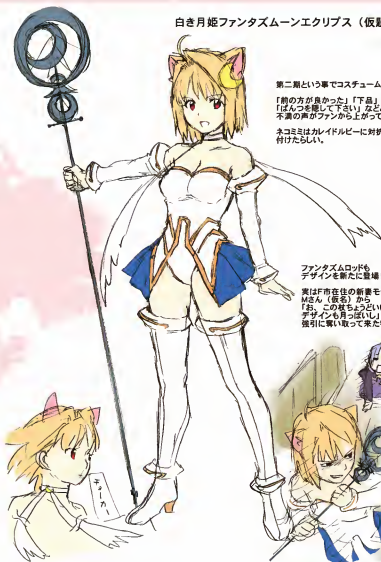
2003年4月1日 - 2004年2月24日 全42話(うち六回放送ミスにより未発表)

「白き月姫ファンタズムーン 劇場版 プリーズクエストミー! 銀河まっふたつ伝説」

2004年4月1日 公開予定・公開未定。



白き月姫ファンタズムーンエクリプス（仮題）



第二期という事でコスチュームも一新。

「前の方が良かった」「下品」「ばんつを隠して下さい」などといった不満の音がファンから上がっている。

ネコミミはカレイドルビーに対抗する為付けたい。

ファンタズムロッドもデザインを新たに登場！

実はF市在住の新妻モデラーMさん（仮名）から「お、このお持ちようどいじやん！デザインも月っぽいし」とかまって強引に奪い取って来た物らしい。

Explanation

魔法少女ファンタズムーン

白き月姫。その正体は誰も分かってはいけいない。ジャンル・不思議系の魔法少女。

……少女……？ うん、まあギリギリ。

自然干渉を得意とする魔法少女で、天候操作、地層変動、はては星の自転逆行による秩序崩壊系魔法。あ、ちょい今のナシ！まで使いこなす。

また、空中飛行一步手前のジャンプ力とかくまも一撃の格闘能力を持つも、本人は「しつけれー！ これも魔法の力だもんー！

……などと可愛ぶっているがどう見ても只の力技です、本当に魔法関係ありません。

後に異なるジャンルの魔法少女と出会い、オンラインワンをかけて戦う事に。

夢と希望のファンタズムーンと、力と策略のカレイドルビー。不思議系魔法少女と軍事系魔法少女の意地と人気をかけた大激突だ。

「これだから電波（不思議）系は！」

「ミリオタにつける薬はないわね！」

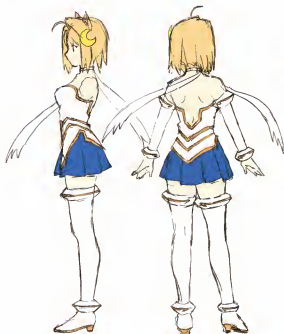
うむ、一つの駅内に立ち食いそば屋とカレーショップはいらねえのである。

Source

出典／TAKE MOON(武梨えり作品集)より

実物は文句なしに素敵ですので、TAKE MOON読んでください。

志賀はタキシード組（仮面）って事で、一つ。





## Introduction

## ミスター・ダウン

聖堂教会のエクソシスト。30トン級のトレーラーを移動手段にするドライバー。

もう一人の悪魔祓い師と共に田舎町・アルズベリを訪れるが、ダウン本人には悪魔祓いの力はなく、主な役割は“道から外れやすい”もう一人の悪魔祓い師の輸送とされる。

ダウンには攻撃手段も自衛手段もないので、悪魔祓いの仕事はもっぱら輸送している“もう一人の悪魔祓い師”が行っている。

側のある顔つきだが、穏和で人当たりのいい性格。エクソシストというよりは学校の教師といった風貌。もっとも本人曰く、人にものを教える資格がない。だそうで、一人でのんびり生きる方が誰にとっても幸福な事らしい。

静かな平和主義者。アルズベリという戦場に赴く事を承諾しながら、自衛の為ですら銃器は持たない。

血や暴力に弱く、ホラムービーにも弱い。異端者による殺戮現場を見ると途端にパニックして足を引っ張る事から、代行者たちには“一緒に任務につきたくない男・ぶちぎりで第一位”と恐れられている。

## Explanation

## 覚書

埋葬機関第六位（暫定）。埋葬機関の殺遺し。

（相棒が補充された後は、二人合わせては正式に六位となる）

元、V & V インダストリー第六開発部主任。

技術屋としてはエリート中のエリートだったが、ある事件をきっかけにV & V を退社、事件解決の功績を買われて埋葬機関局長ナルバレックにスカウトされる。

といっても信徒としての在り方は平均よりやや下といったところ。聖書を机の引き出しに寝かせておく程度の信心で、それは事件後からも変わっていない。

貴重なタイプのエクソシストで、今のところ、ある条件下において彼の代わりになるエクソシストはいないとされている。

聖母の予言において、生涯で三度悪魔祓いをする、と啓示された。

教会においてただ一人、成体となった悪魔祓いを祝った男。

## Source

## 出典/the dark six(仮名)

きのこの脳内ゲーム・月姫2における聖堂教会側のキャラクター。

代行者としての秘蹟・異能も、魔術的な素質もない為、一般人サイドの理解者として活躍する。

教会側の人物たちからは「殺し合いに参加しないのだから雑用係として死ぬ」とこき使われる苦勞人。

おもに武器の運搬、調達係として活躍。

ゴキガンだめ





## Prelude II

それは素朴な風景に不釣り合いな、無骨な鉄の塊だった。

総重量35トンを超える移動要塞。こんな田舎の道には今まで通った事もないだろう内燃機関の荒くれ者。煌々と光るヘッドライトとエンジン音と、ギチギチと言をたてる悪魔の荷台を引きずる大陸横断大型車両。

「悪魔を哀れむ歌」

鉄槌と木下架と医療器具、そして「悪魔祓い」を搭載した、文字通りの最新鋭の怪物である。

UKに上陸してからこの四日、この怪物が人目を引かなかつた事はない。

いや、正しく言うのなら、人々がより驚いたのは「悪魔を哀れむ歌」という巨大な車両ではなく、そのハンドルを握る男性の姿にである。無理もあるまい。凶悪なマシンの運転席には、温かな風貌をした神父の姿があつたのだから。

神父は田舎道に悲鳴をあげさせながら、慣れた手つきで怪物を走らせる。狭いあぜ道も夜の暗さも気にならない。注意点があるとしたら荷台内の気温ぐらいか。中は常温で安定しているが、万が一にも20℃を下回る事になればすみやかに荷台を放棄し、爆破してはならないのだから。

もちろん、出来るのなら避けたいトラブルだ。

愛車の半分が失われるのはいたくない。田舎の平穏を乱す事とか、荷台内にいる相棒が跡形もなく消し飛ぶのは、まあ、運がなかったと綺麗サッパリ忘れられるのだから。

「……ダウン。通信。鳴っているのではなくて？」

荷台内からの内線が響く。  
不埒な考え事が見抜かれたのか。その、燃え尽きても別段気にならない相棒の声を聞いて、神父は外線をオンにし、

### Explanation

#### ／聖堂教会【組織名】

“性的的な”意味を持つ一大宗教の裏側。

神の教えを説く彼らは、その教義に反したモノたちを認めていない。“異端”という存在を表面向きでは無いものとして扱うが、中には熱狂的に排斥しようとする者たちがいた。その「異端狩り」が特化し、巨大な部門となったもの。

中でも魔を滅ぼす能力、資格を持つ者は「代行者」と呼ばれ、主の教えに存在しないモノを物理的に排除する。一方、悪魔祓い（エクソシスト）は魔を祓い、これを一時的に退ける聖職者である。

「あ、もしもしミスター？ すみません、追加発注をお願いします、いいんですか？」

ノイズ紛れの受信音に、重苦しいため息をついた。  
今回の仕事に就いてから三度目の通信。

必要な器具は「まともにして発注しろ」とあれほど言ったのに、この女は逃げれもせず次から次へと我が儘を言ってくる。

おかげで仕事先にはまだ通り返してない。

やれ粘着弾だのM60用弾薬箱を数ダースだの、果ては時代錯誤なボトムマッシャー（埋葬仕様）だの、金も手間も考えずねだられては寄り道が多くなるのも当然だ。

……まあ、もつとも、こんな注文をするのはこの女くらいで、自分が役に立つといったらこんな事ぐらいなのではあるが。

吸血鬼には個人携帯用の銃器では効果も薄い。

なにしろ、銃弾を見てから避けるという飛ばし屋なのだ。面の攻撃でなければ振るもしないが、今もって連中は人喰いである事を謳歌している。

が、この女はそんな連中相手に、点の攻撃であるハンドガンでもこめかみを撃ち抜くブラボな怪物なのだ。

笑い話一步手前だが、仕入れてきた品物が無駄にならないのは素晴らしい。それに笑えない冗談は神父が愛すべき物の一つでもある。我が儘の一つや二つ、素直に聞いても罰は当たるまい。

一相変わらずこまった女ですが、唯一のお得意様です、仕方ありませんねえ」

トレーラーを停車させ、メモを取る。

意外な事に、今回の注文はそう物騒なものではなかった。

小さな村では手に入らないだろうが、ちよつとしたマーケツトがある町なら手に入るものばかりだ。

「はじめの四つは承りましたが、それ以後の物は却下です。だいたいで、現地で調達できるんじゃないですか？」

交渉はあっさり終了した。

女はもう、と困りながらも引き下がり、神父はやれやれと胸をなで下ろす。

「では到着予定はさらに二日後という事で。また寄り道をする事になりましたから」

神父は通信を切り、運転席を出る。

しかし、いま注文された品物の幾つかを、荷台にいる相棒が持っていた覚えがあったからだ。

「失礼。入ってよろしいですか、お嬢さん？」

「どうぞ、退屈してたところよ、ダウン」

荷台の扉が開く。  
中は夜の闇より暗い。細かに点滅するライトが、かろうじて奥行きを報せている。

扉を開けているのは銃器と電子、福音と魔の闇。  
闇に眠っているのは銃器と電子、福音と魔の闇。

扉を閉め、中の聖息がこぼれぬよう密閉する。神父は「目ふり」に、寝台に横たわる相棒の姿を見た。

「また、随分と調子が悪そうですね」

ええ。田舎の人たちは信心深いから影響を受けやすいの。でも都会より力持ちは綺麗。変わりやすいかわりに、痛みはとて心地いいわ

それは良かったと満足げに微笑んで、神父は先ほど受けた注文を口にする。

「え？……ターメ……なんですって？」

「いや、薬品の一つみたいなものかと。ああ、基本は食用だと言っていたが、お持ちですか？」

「……そういつたものは持ち合わせていません。私の持ち物で口にはできる粉状の物と言えは、花椒粉くらいなもの」

「はあ、そうですか。うーん、それ、どつちも似たようなものだと思っんですけどねえ」

「……度々難しい問いです。決して同じものだなんて思わないでください」

相棒はゴ機嫌ナメタ。何事も受け流す彼女にしては珍しい事なのだが、あいにく、神父にはそのあたりの機微を感じ取る細やかさは衰えていた。

## ／花椒粉【調味料】

ホワジャオフェン。

炒った花椒をすり鉢ですりつぶしたもの。中華料理の代表的な調味料。特に四川のものは辛く熱く香り高く、舌を刺す程だとか。

言うまでもありませんが、麻婆豆腐には欠かせないアイテムです。

「仕方ありません、諦めて寄り道をするのでしょうか。到着は二日後になります、耐えられますかお嬢さん？」  
「そう言った時の為に貴方がいるのでしょうか、ダウン。それより――」

ずる、と音をたてて荷台に横たわった何かが動く。

その異形、シンメトリーではない姿に神父ははやかに感嘆する。なんと美しい。血にまみれてなお白い肌。魔に侵されながら魔を駆める、奇形の聖母。

「それより、貴方は任務の内容を知っているのか？ 私たちが向かうという事は、そちらの方も期待できるのかしら？」  
つまり食事はできるのか、と聖母は問う。

「いえ、残念ながら。今回は基本的に吸血鬼退治です。私たちはよほどの事がなければ入り出番はありません。ですが――」

事は聖堂教会だけの話ではない。

今回の件はもう何年も前から用意されてきた一大決戦だ。教会はおろか、魔術協会ですら。分かっているながら、傍観してきたアルズベリの発展。

イギリスの片田舎の村が、わずか十年でプラントを持つ工業地帯に変貌してしまった。

あくまで人間の手だけで。正しい資金と労働によって、商業的に無価値な土地に、時代遅れではあるものの不釣り合いな工場群が建てられた。

残念ながら。その目的が死徒による牧場たとしても、それが善良な人々によって運営される行いなら、魔法使いでさえ手は出せない。

然り。一切の怪異、一切の神秘を用いない「正しい人の営み」によって出来た物に、どうして神秘側の存在が手を出せよう。手を出せるとしたら、それはその「正しさ」が崩壊した後のみである。

「まったく、誰が考えたもののなかだ。地獄が開くと判っているのに、聞くまで手出しできないんですからね」

……いや、誰が立案したものが、神父はよく知っていた。

過疎化によって滅びただけだった村の発展に力を貸し、工場地帯建設に出資したのはV&Vインダストリー。神父にとつては懐かし、光臨れる、我が家である。

地獄……いいのダウン？ 私はともかく、貴方はただの運搬役でしょう？ そんな町にいたら、あつという間に食べられるわよ？」

とりあえずは、真つ先にこの聖母に。

神父はまっとうな人間である。

仲間たちのように人間を超越した者ではない。アルズベリを訪れば、生きて帰れる保証はない。それに悪い事だけではあ

「まあ、局長直々の命令です。それに悪い事だけではありません。なんでもあの村に行けば、自分の名前を取り戻せると言言があったようで」

婚しように神父は語る。自分の名前。ダウンと呼ばれる前の、本当の名前が戻るのだと。

「？ ダウン、貴方自分の名前が分からないのか？」

不思議そうな声。

はい、と返答する神父。

「ヴン。貴方の名前は××××でしように」

しばしの沈黙。神父は困ったように、頭痛を抑えるように、片手を額を置いて、

「ほら。貴方の名前なら、誰だって知つて――」

「いや。今、なんと言ったのですか、お嬢さん？」  
笑みの張り付いた顔のまま、ソツとするほど空虚な声で、

「今の響きは、私にはよく聞き取れない。」

「すまないが、私に解る言葉を使つてくれ」

暗く。何か、歪んだ声をあげた。

## Explanation / 埋葬機関【組織名】

聖堂教会における、より専門的な異端邪門の代行集団。  
形而上的であるエクソシストではなく、聖魔殺しのエクスキューター。他国の超魔術師と協力する事は絶対になく、常に単体で行動する。  
完全な実力主義制度で、能力があり教会にとって都合の悪いモノを始末するのなら何者であろうと迎え入れる。局長ナルバレックを含めた七人と予備のみのもう一人、計八人で構成される。



ああ、と聖母は祈る。

この男は、まだ帰ってきてはいないのだ、と。

主よ、この魂に憐れみを。

自身の名前だけを取り戻そうとするこの男は、永遠に、自分の名前だけを認識できない狂気になる。

かつて、彼は地獄にいました。唯一の生還者となった後も、いまだ、その心は囚われたままです。肉体だけでなく心も連れ帰って、くればよかったのに、一度抜け出してしまったからには、もう二度と、取りに戻る事はできないだろう。

……ダウ。アルズベリには、他に誰が？

仕事の話に戻す。神父には、常に狂気を与えておかねばならぬからだ。

「他に三人ほど。先行している代行者が一人。もう二人の到着は私たちがより後のようです」

先行者がいるのね。それ、もしかして彼女？

「はい。彼女、一番身軽ですからね。今じゃ立派な斬り込み隊長です。加えて、今回の件は何かと因縁があるそうで、彼女、今度こそメッタメタに打ち負かすって張り切っていました」が、微笑む神父。

——で、漕ること約半日

中世の町並みと鉄筋の工場が混ざり合った不協の風景を、一人のシスターが歩いていて、

黒髪と眼鏡。頑丈そうな編み上げブーツで、石畳の道にカツポカと足音を響かす。

「ほうほう。西通りには見慣れない人たちが集まる酒場がある、と。一階は綺麗なお姉さんたちがいっぱいいる？……いやですわね。日没から夜明けまで、なんて話でなければいいんですけど」

どこまで本気なのか。シスターは観光客を装って街の少年と世間話を繰り返していた。少年もまんざらではないのか。親切

に町の様子を説明する。

「なるほどなるほど、たいへん勉強になりました。これ、お礼です。つまらないのですが」

シスターは換金しやすそうなアクセサリーを手渡すのだが、少年はシスターを抱えていた紙袋いっぱいバンに閉心があるようにうた。食いつく坊ですわね、と笑いあいつパンを分け合うシスターと町の少年。

「ではようなら——と、もう一つ聞き忘れていました。ね、この町に大きな食堂はありますか？ 異国情緒ゆたかな、節操なく色んなメニューを集めたような。具体的には、こういう料理があるかどうかなんです」

返答は濁りがちに。

期待に満ち満ちたシスターに、少年はどう答えたのかと途方にくれるのであった。

そうして、絶望的な少年の返答から数分後。

宿に戻ったシスターは、泣きのない動きで通信機を手にと

「あ、もしもしシスター？ 武装の追加発注をお願いしたいんですけど」

タメリックとコリアンダーとクミンとレッドペッパー。もちろん自分用のガラムマサラは持参してですから、そちらは結構です。あと人参と玉葱と林檎と牛肉。え、それぐらいは現地調達する？……む、仕方ありません。譲歩しますから、香料は多めに、できるだけ高価なものを。あ、領収書は局長名義で、ひとつ」

## ／シスター【用語・人物名】

ダウン達より一足先にアルズベリに消入した代行者。人当たりのいい笑顔と、どんな環境だろうとすぐさま順応する社交性をもった、理窟暗黒な人権者。

外交に堪能にと、なんでもかんでも一落手として重宝されている。勿論、「試験は前よ、足付は絶えよ」という理窟暗黒のモットーは染みこんでいるので、いざ事が始まれば編み上げブーツで華麗なステップを披露する。

……あと、こーゆー笑顔もいかにがんじがらめなものと想うんだ。





Introduction

## ロード・エルメロイⅡ世

プロフェッサー・カリスマ

マスター・V

グレートビックベン・ロンドンスタ

女生徒が選ぶ時計塔で一番抱かれない男 等々、  
様々な異名を持つ時計塔の怪物講師

本人は魔術師と宣言してははからないが、魔術師  
としてはどうしようもないほど平均。

が、講師としての手腕はズバ抜けており、他人の埋  
められた才能を見抜き、鍛える事にかけては時計塔随一  
の人物だったりする。

彼の生徒になって王冠の階位を得なかった魔術師は  
おらず、彼が教えたたちを集めれば時計塔の勢力図が  
変わるまでとまで言われている

もっとも本人にそんな野心はなく、

笑い話にもならん。いまだ四階級どまりのこの私か、  
なんて他人の面倒を見てやらなきゃいかんだ

とまあ、こんな感じで教えたとは困わりたくも  
ないらしい

魔術師見習いだった頃の彼は絵に描いたような「自  
分を天才と疑わないナルシスト」だったのだが、十数  
年ほど前のある事件をきっかけに改心し、以後は困  
りながらも努力を重ねた結果、プロフェッサー  
などと呼ばれる事に

他人をプロデュースする事に限しては当代一の傑物  
だが、エルメロイⅡ世にとってはそんなものとはどう  
もいいた 彼本人は魔術師として大成したいのたろう  
そんなわけで、講師として人人気の自分にはまった  
く興味が無い

……むしろその事実にはイライラしている為、ここ数  
年は常に不機嫌そうに院内を歩いているのだとか

Explanation

## その正体

ロード・エルメロイⅡ世というのは彼の本名ではな  
い。数々の異名同様、本意にも異名したものである  
もとはロンドンにおけるロードの一人、ケイネ  
ス・アーチボルト・エルメロイ門下の魔術師見習いだ  
った彼は、ケイネス卿の死後、色々あって没落一歩手  
前になったエルメロイ派（アーチボルト家）の復興に  
尽力した

事が落ち着いた後、アーチボルトを持ち出した  
男、一新なるエルメロイ としてエルメロイⅡ世など  
と呼ばれる事に

無論、正式なエルメロイの継承者は他にいる

“当時は幼く、アーチボルトの末席にいた少女がそれ  
だ 彼女はアーチボルト家を立て直した功績と、もど  
を正せばおまえが悪いから一生私に仕えよ、とい  
う事で彼にエルメロイⅡ世という名を与え、嗣続たの  
である

Source

## 出典／??? (未発表)

しいて言うならFate stay night

どの話であろうと、舞台がロンドンよりになると  
ちよこっと顔を出す

遠坂凛がロンドンに留学した後、後継人になるの  
はこの人 その条件は「私は君にいい魔術の指  
導はしない まあ、他の学課への推奨状ぐらいは書  
いてやる」というものだった

日本も日本人も大嫌いなのに、唯一の娯楽は日本  
製のゲームというあたり、根は憎めない小市民

ゲームオンチな顔に、

君はアレかな ぼろ、あの街には詳しいのかな  
ウエノとかアサクサとか、そのあたりに近い街の話  
なんだが……

と内心ワクワクしながら話を振るも、急にアキハ  
ハラどころかニホンバシすら興味がないと即断され、  
ファック！ オマエは最悪の日本人だ！

と逆ギレするのであった

冬木市における聖杯戦争を解体した人物



## モードレッド

“決して、その兜を外してはなりません”

アルトリアの姉、ギネヴィアの子  
「伝説ではアーサー王とギネヴィアの間に出来た不貞の子とされる」

ギネヴィアの推御だけを持ってキャメロットに訪れ、卓越した剣技を披露して円卓の騎士の一人となった仮面の騎士。出口が不明ながらも剣を与えられたのは、その能力とまっすぐな騎士道精神ゆえ、と言われた。

Fateではギネヴィアがアルトリアから作ったクローンという設定。

（ホムンクルス 剣中で説明する必要はないが、わりと「真正銘のアルトリアの息子」擬似的に男性となっていたアルトリアをギネヴィアが魔術で幻惑し、精子を採って自分の卵で育てた）

私の息子である貴方には王位を継承する資格があります。今はその身を隠し、王に仕えなさい。そして——いすれ王を倒し、その身が王になるのです。——という母の妄念を、一身に背負っていたが、モードレッドにはその野心より先にアーサー王への憧れがあった。

モードレッドはホムンクルスである為、成長速度が人間より速く短命。

いっつな出生の自身を恥じ入り、無意識にまっとうな人間への嫉妬心を持っていたものの、子供特有の純真さで“完璧な！”であるアーサー王を崇拝していた。

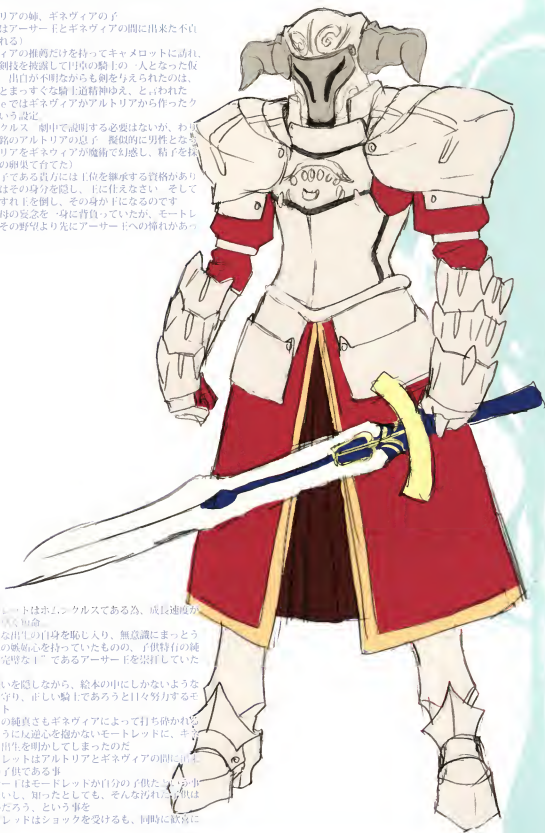
人間嫌いを隠しながら、絵本の中にしかないような騎士道を守り、正しい騎士であろうと日々努力するモードレッド。

か、その純真さもギネヴィアによって打ち砕かれ、いっこうに反逆心を抱かないモードレッドに、ギネヴィアは出生を明かしてしまったのだ。

モードレッドはアルトリアとギネヴィアの間に出来た不貞の子供である事。

アーサー王はモードレッドが自分の子だということを知らないし、知ったとしても、そんな汚れた子供は認めないだろう、という事を。

モードレッドはショックを受けるも、同時に歓喜に包まれる。



自分はまっとうな人間ではないが、あの王と同じ血を持つ子供なのだ。否、あれほど人を超越した王の息子として、人間でない事はむしろ誇るべきこと。名実共に、心身共に、自分は下の跡継ぎに相応しいのだと、喜んでいるとにつめよるモードレッド。父のいなかったモートレッドにとって、アーサー王はもはや神に近い“父”の姿だったからだ。

しかし、アルトリアははっきりとモードレッドを拒絶する。

なるほど 師の好評とはいえ、確かに貴公は私から生まれたもの。たか、私は貴公を息子とは認めぬし、  
『位を与えるつもりもない』

アーサーは姉キネヴィアを嫌っている。その子供である自分が、どうしてアーサー王に認められようか。そうか……なぜ私が未成であったのか、ようやく分かった。

とれほど努力しても、誰より優秀になっても、キネヴィアより生まれた時点で、王は自分を一生薄汚れた子供と蔑むのだ。

今までの愛情が大きかった故か、拒絶されたモートレッドの憎悪は燃え上がる。

結果として円卓の騎士内部からアーサー王への不信感を広めていき、アーサーがローマ遠征にいった間にキャメロットを掌握。

長い戦いで疲れ果て帰還してきたアーサー王を、国をあげて責め立てる逆逆の将となる。

アーサー王憎し、王座は私こそ相応しい、と猛るモートレッドだが、その本心はアルトリアに認めてもらいたいのだけ。ただ、王に息子と呼ばれたかっただけだった。

最後の戦い

お互いの軍が死に絶え、剣の丘で対峙する二人。見たかアーサー王。貴方の軍はこれで終わりだ。私が勝とうと貴方が勝とうと——ご覧の通り、もはや全て滅び去った。

こうなる事は分かっていた苦。私に十位を譲ればこんな事にはならなかった。そんなに私が、キネヴィアの分身である私が憎いか、と叫ぶモートレッドを、アーサー王は無表情に言い放つ。

私は貴公を憎んだ事は一度もない。

貴公に王位を譲らなかった理由はただ一つ。

貴公には、王としての器がないからだ。

激情にかられて走るモートレッド

(伝説ではアーサー王の槍がモートレッドを貫くも、最後の方でアーサー王に致命傷を与えた、とされる)

『騎士の末裔ふれ、槍に貫かれたまま崩れ落ちるモートレッド』

“決して人前で外してはなりませんよ”

そう母に言いつけられていた飯面から解放され、アルトリアととうり、一つの素顔をさらしたまま、

——父、上。

せめて一度、王に触れようと血に濡れた手を伸ばしたまま、かなう事なく崩れ落ちた。



Source

## 出典／アニメ Fate/stay night

Fate/stay night 内における、アーサー王伝説の終わりを告げる騎士。実は女の子だったアーサー王。なんて無茶を通したFateの芸風に漏れず、無茶あふれる設定になっている。

上のテキストはアニメ化の際、カムランの戦いの資料が必要だったので書き起こしたものだ。

Fate/stay night 発売当時から“セイバーはどのような男装生活を送っていたの？”という疑問に、ちよっとだけお答えできたでしょうか？



Introduction

## カレイドルビー・ シュバインシュタイン

新たな敵を前にし、パワーアップを遂げたカレイドルビーの姿。

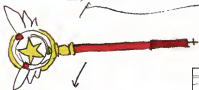
カレイドステッキと宝石剣ゼルレッチを融合させた悪夢の武装形態である。

カレイドアローは戦闘機なみの飛行能力と、圧縮した魔力弾を撃ち出す熱線狙撃銃式を兼ね備えたルビーちゃん秘密装備の一つ。その威力は600メートル先の移動要塞車両・ベンガルティガーの装甲をも貫通する。

まさにジェノサイドフィーバー。凄さん変形ですーっ、なんて可愛く言っても騙されませんが、なぜかこの兵器で壊せるのは無機物のみ。この鉄の余波で高度3000フィートから投げ出されようと、生物であるならどうあっても死なないのであった。

このあたりまでくるとカレイドルビーもかなりノリノリで魔法少女ぶっている。人間、慣れてしまえば何事も楽なのであった。

きゃー凄さん変形ですーっ!



カレイドアロー



## 『無限妖精カレイドルビー』

(※作品タイトル)

「白き月姫ファンタズムーン」としのぎを削りあった魔法少女アニメ。どちらが裏番組であったかは不明。

並行転写プリズムロッド・カレイドステッキによって愛と正義の魔法少女となったある少女の、正義と鉄樹と大勝利の物語。

自分の世界を平和にした後、並行世界をみよみよんとスライドしていく魔法特性を生かし、いろんな世界に顔を出すコトに。

しかし、世の中そう言い話はありません。自分の世界から離れた彼女は主役のライバル役としてしかキャラ立てができなくなり、どんなに強くても貴方の為に戦ったんじゃないんだからであり、つまるところツンとかデレれはいんじゃない?

## 出典／鴨ほうすの物置より回収

TYPE-MOONにおける演出・スクリプト職人つくりものじ氏がこっそりと、単なる気紛れで走り書きしていたスピンアウト企画。

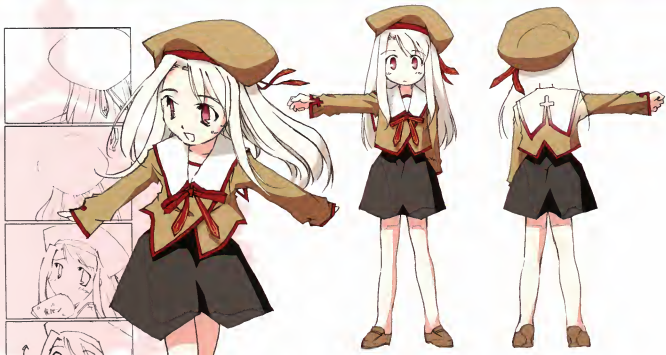
あまりにこっそりだった為、本人も翌日にはすっかり忘れ、長く放置されていた。

氏の机にはこの手の落書きが無造作に置かれ、時にためらいもなく捨てられる。勿体ないってホント

Explanation



Source



穂村原学園小等部制服



セラお母さん

イズお姉さん



Introduction

## アインツさん家のイリヤさん。

穂村原学園小等部に通う、ドイツからやってきた女の子。  
もはや言葉による説明は不要。セラお母さんやリズお姉ちゃん、そしてお嬢さまイリヤの愛らしさにどうにか慣れてほしい。ボクはどうにかなった。  
第一話ではカレイドルビーの犠牲者として事件に巻き込まれるが、言うまでもなく、真のヒロインは彼女である

Explanation

## 絵コンテ

タイアップ企画だったのか、どうやらアニメ化も決定している模様。  
ページにうつすとちりばめられているのはその断片だ。宇宙空間での艦隊戦、アインツさん家の朝のコマ、そして強襲するカレイドルビー——まさに、どのような物語が始まるのか想像すらできない超コンテと言えるだろう。ほんと、マジ想像できない。

Explanation 02

## 出典／鴨はうすの物置より回収

没企画の一つ。タイガー道場の延長として考えられたもの。言うなればタイガー道場劇場版だが、ここまではどの関係者でもビジュビジュでやってほしい。あと、セラお母さんの可愛さは異常。





## 三枝由紀香

ほにやっとした笑顔がトレードマークの、穂群学園  
岡女子陸上部のマネージャー  
友人の詩寺楓、水室跡とあわせてTatami人姐と呼ば  
れている

TYPE-MOONでは珍しい、純粋な癒し系クラスメイ  
ト 保護対象にしたいとてくさい

人姐の中では一番幼く思われがちだが、芯に強い  
ものがある本当の意味での優しい子

弟たちにはいいお姉ちゃん、友人たちには愛すべき  
マスコットとして親しまれている

陸上部のメンバーは、由紀っちは人を喜ばせる天性  
のマネージャーだそうで

最近、弟の彼女である金髪のお姉さまから、  
覚えておいてねと花札を教えてもらった  
とか、などとか



## 出典／Fate/stay night

2年A組の女生徒として登場  
その他、魔法少女界では世間を騒がす怪事件の解決  
者と高確率で場に居合わせたり、人質になったりする  
チラシの娘だが、マキシや水室と同じく、お兄ちゃん  
になってくれたりすると幸せで死ぬ。我が家  
善良なる人々なくして、物語は語られない  
そんな、主役たちを創り立たせる大切なファクター  
の代表として登場していただきました

# 帽子の少女

SISTER &amp; CHINESE HONEY

クラス	一年B組
所属	スーパー合気道部、秘境料理研究会
好きなこと	部活、ひと昔前のカンフー映画
苦手なこと	恋愛相談、年上の女性
好きな食べ物	中華まん、いつかどこかで食べた 真っ赤なマーボー
苦手な食べ物	サブリメント、いつかどこかで食べた 真っ赤なサンドイッチ
趣味	野球、サッカー、カンフー
将来の夢	おいしい中華料理のお店をひらく
尊敬する人	パンダ師匠
血液型	O型
誕生日	5月4日



Source 出典/スピニングTM

???

# 魔法のお手伝いさん マジカルアンバー

ファンタズムーンにて登場する魔法少女。  
ある時は味方（のような敵）、  
ある時は相れるいい人（っぽいけど敵）、  
そしてまたある時はどこからどう見ても敵、  
という、いつもほかから、笑顔がキュートなお手伝いさん……何者なんだ、いったい。

キャラ的にファンタズムーンと同じタイプだが、分  
かり合える事はたぶん一生ない。出会ってしまえば楽  
しげな会話が繰り広げられるが、その実、言っている  
コトがまったく噛みあっていない二人である。

全身を覆う黒フードがトレードマーク。ご町内を騒  
がせる魔法少女を徹写すると決まって黒いフード姿が  
写ったりするが、

いやですね、それは心靈写真ですよ秋葉さま。た  
ま、そこいらにいる自爆雲が写っただけかと。根拠  
は非科学的ですねー。あ、ちなみに私でしたらその間  
はお屋敷で志貴さんとお掃除を

等々、にこやかにアリバイを提出するのであらう。





Explanation

## おもな能力

魔法少女属性／黒幕。

相手が真面目であればあるほど強くなる、という人食った魔術系統。ただし貞剣に止気じゃない相手には効果薄なのであしからず。

ホウキに乗って空を飛ぶオールスタイルの魔法少女。……アレ、それって少女じゃなくて魔女なのでは、というツッコミはスルー。

言葉巧みな言語療法と、力技とも言える投薬治療が得意技。数々の怪人たちのスキルを研究していたのか、黒鍵を模した注射器やすごい中国拳法も使いこなす。

ちなみにメカ作ったりはできません。そーゆーのは善意の協力者(住所不定の錬金術師)をムリヤリ働かせて作らせるのです！

ちなみに、当主さまには常に弱いが、最後の一线では強いという微妙なパワーバランス。

一方、長男(養子)さんには常に強いが、最後の一押しで弱くなるんだって。

あ、本当の長男相手には常時最高に鬼ですよ？

フード取った状態



Source

## 出典／スピニングTM

スピニングTMを作った原因にして、記念すべき一人目のTM魔法少女。

他の並行世界では善の魔法使いによって倒され、彼女をモデルにした魔術礼装が作られたとか何とか。どうなんだ、そのへん。

初めて存在が確認されたのは数ヶ月後から。

最近では「とびつきひめ」という並行世界で黒猫と一緒に大活躍しているとか。ありがとう、あんなバカネタに最高の形で応えてくれてありがとう01stepの方たち！

デザインはファンタズムーン同様、漫画家の武梨えり氏によるもの。

琥珀=キツネというヴィジョンはもうシャッポを脱ぐしかない。基本悪役なのに、他のどの魔法少女より魔法少女らしいところがもうどうしようもなく愛を感じる。

尻尾は着物の上からついてるらしいです…



Introduction

## 石杖アリカ

いつも気だるい、自虐的だけど前向きな悪魔使い。慢性的な記憶障害。中心にいない主人公。一人でないで生きていけない弱い生き物。

大抵の事は肯定するが、一つのを二人で分ける、という行為には難色を示す。

片腕を食べられた後、“脅威”という精神反応を亡くしてしまった為、誰がどう見ても危険な状況にひよこひよこ歩いてしまう。

結果、関わらなくてもいい厄介事に付きあうハメになる、典型的な主人公気質。

毎話、事件の始まりにあたる鍵。

使用後は屑溜みなので、ポケット等に仕舞ったまま、ずっと忘れてしましましょう——

Source

## 出典／DDD

DDDの主人公。各話の主人公ではありません。

気持ちのいいやさぐれっぷりを目指して、今日も懇懇つきながら生きています。

『Fate/hollow ataraxia』のメインの一人、アヴェンジャーと基本設計を同じにするが、向いている方向は真逆。アンリが外に向かう人なら、アリカは内に向かっている。

## 迦遼カイエ

地下室の悪魔。性悪。残酷無情。ひとでなし。  
少女のような容姿をした少年。一人では生きていけない強い生き物。

感情豊かで、世に愉快な事あらばケラケラ笑い、世に悲しい事あらば天使のように微笑む。

感情の名を冠した義肢を持っている。

ちなみに、いつもソファで眠っている黒犬は『憎しみ』に反応してワンワン鳴きます。

それなりの事はできるが、結局のところ自分だけでは何もできない。

人間嫌いだけど、寂しいと死んでしまう。

曰く、神が完全無欠で全知全能なら——悪魔は、荒唐無稽で人知無能でなければならない。



## 出典／DDD

月姫のメレム・ソロモンと何かと相似点を持っているが、直接的な繋がりはない。DDD自体、月姫、Fateとは接点のないお話です。

月姫、Fateは基本的にポジティブでしたが、DDDは全体的にネガティブより。

しかし、そんな暗い雰囲気はこやま氏の描くカイエの妖しい可愛さの前には無力なのであった。誰だよイッツ男とか設定したの！ と鏡に向かって怒鳴る菌糸類であった。





## 干将莫耶オーバーエッジ

Fate/stay night の「ルート、Heavens feel」におけるブラックセイバーVS上郎の戦い

あの戦いで上郎は干将莫耶を最大用法したが、それを正統な持ち主であるアーチャーが行うとどうなるか？ その答えがこの干将莫耶である

連続投影のラスト、三度目の投影の際、アーチャーの強化によって干将莫耶はこの形態となる

アニメ版でアーチャーVSバーサーカーが映像化されるとの話になり、それならばと、こやさんにデザインしてもらった一品。このデバ包丁じみた物騒さにラブなのです

また鎧冑三連は「三つの」を重ね当てであり、正しくは飛んだり跳ねたりはしません。念のため



# Gransurg Blackmoa



# グランスルグ・ブラックモア

黒翼公。

オーストリアに居を構える死徒二十七祖の一角。本名不明。出身も名前も長い年月の末に破却した。グランスルグ、ブラックモア、共に彼の在り方からついた異名にすぎない。

多くの眷属を有し、大がかりな儀式には欠かさず足を運ぶ社交的な吸血鬼。……なのだが、どうにも他の祖たちからは疎遠に扱われている。

吸血鬼に噛まれ、血を送られた人間は吸血鬼になる。だがブラックモアの場合、彼に血を吸われた人間はみな鳥の頭と翼を持つ怪物と化してしまうのだ。

人としての体裁を保たない彼の姿と、鳥と人の合成と化す眷属たちが優雅さに欠ける為、他の祖たちはブラックモアを蔑んでいるのだ。

(ブラックモアに言わせれば、人の姿をしている時点で他の死徒たちこそ優雅さに欠けているのだ)

黒翼公という肩書きは皮肉からきたもので、現・死徒の王たる白翼公と対比したものだ。

最初にして高貴たる白い翼の君とは似ても似つかない、黒い羽の獣使い——というのが死徒世界におけるブラックモアの扱いである。

反面、実力・歴史ともに白翼公に双する死徒なので、面と向かって彼に皮肉を言えるのは二十七祖の上位ぐらいなものであるが。

## 生前

生前の彼は鳥を神聖視する魔術師だった。

鳥のフォルム・内部構造を崇敬し、彼らこそこの星の王であると説き、彼らの為により住みやすい世界を作り上げようと生きていた。

魔術世界において、鳥は“死後の魂を運ぶもの”として扱われている。その偏執的な思考はどうあれ、鳥を己の魔術基盤におくグランスルグは優れたソウルキャリアーであった。

しかし、その偏執が朱い月に見初められたのか、戯れに戦いを挑まれ、敗北。

魔術も並、保有する血にも目を引く要因はなかったグランスルグはあっさりと殺される——害だったのだが、最後の最後である偶然に助けられた。

その偶然を良しとした朱い月はグランスルグを見逃し、血食として用は成さないが、以後は自分付きの魔術師として生きよと命じるのだった。

人間として破綻しているものの礼節を重んじていたグランスルグは心身共に朱い月に忠誠を誓い、白らの手で死徒化の道を歩む。

魔道の果てに吸血鬼となった彼は、『主に仕えるのでしたら、それに相応しい姿になりましょう』と自らの姿を“鳥”に変貌させていった。

朱い月に仕えていた頃の彼は死徒というより使い魔で、よく朱い月の為に働いたという。

## ネバーモア

彼は二十七祖たちが真祖たちから離反した後も朱い月に仕えていたが、朱い月がゼレリッチによって露散した後は死徒として自律した。

16位を名乗っていた祖の居城に堂々と攻め入り、この一族を殲滅、以後はブラックモアと名乗る。

もともと朱い月存命時から“二十七の一番”と認められていた彼であるから、他の祖もこの襲名を認め、ブラックモアはようやく本来の能力に相応しいタイトルに落ち着く事になった。

この襲名のおりに使われた固有結界がネバーモア。

市を覆う死羽の天幕、月も星も飲みこむ、絶対無明の“死の世界”である。

“——気をつけたまえ。  
我が夜に舞う鳥たちは、死者にのみ優しいぞ——”

そう宣言し、ブラックモアは一つの祖とその派閥を壊滅させた。

一切の流血もなく、城壁も庭園も、カーテン一つ傷つける事なく、百を超える吸血鬼たちを皆殺しにしたのである。

## 出典/the dark six(仮名)

月姫2（脳内）における死徒側のキャラクター。

トリ紳士、吸血ガッチャマン。

メレムが死徒サイドと教会サイドに理解のある吸血鬼とすると、彼は死徒サイドと魔術師サイドに理解のある吸血鬼。

祖としての誇りなんぞより、朱い月の威厳を守る為に参加する。

狂言回しのトリックスターではあるが、実力は化け物扱いの月姫2の中でもトップクラスに位置する。





## Introduction

## メレム・ソロモン

埋葬機関の五。二十七祖の二十位。シエルにとってイヤな先輩。古今東西の秘宝のコレクター。埋葬機関に所属しているのも、教会が封印している秘宝の近くにいたい為、とされる。

もともとは動物と心を通わせ、人の願いを具現化する神子（星の端末）で、決して村の外に出ないよう、手足をもぎ取られて祭り上げられていた。

手足を切断したのは神子は人のカタチをしていてはならないという信仰と、単純に、こんな便利な道具を逃がさない為。

（某アンリマユと境遇こそ同じだが、こちらは本当に神子であったワケだ）

メレムはそうして死ぬまで村人たちの慰めモノとして生涯を終えるところだったが、偶然通りかかった朱い月に見初められる。

「人々の願望をカタチにする異能」を愉快に思った朱い月は、村人たちに夜が明けたら皆殺しにする、と宣言。命が欲しいのなら彼らの願望で私を殺してみよ、とゲームを開始した。

村人たちの「死にたくない」という願望は実に醜く、強大だった。

それを実行に移すメレムへの負担もかまわずに、村人たちは次々と「都合のいい神獣」を想像し、朱い月

に挑ませる。

無論、そんなものが朱い月に敵うはずもない。

村人たちの願望は果てがないが、夜明けまであと少し、というところで願望をカタチにするメレムが限界を迎え死亡。残った村人たちはメレムと朱い月を呪いながら死んでいった。

……その後、

地平線に太陽が昇りだした黎明時に、朱い月は息絶えたメレムに口吻を与え、死徒として蘇生させる。“飲んだ、好きに生きるのがよい。己が手足の代わりなぞ、汝は幾つも描きあげてきたであろう。元となった願望は醜態であったが、汝の描いた相は名画であった。——あれほどの偶像ならば、汝の手足を担うに相応しいと思うのだが”

朱い月の言葉に魅入られたのか、メレムは『村人たちの信仰が作り上げた』聖堂から四つの偶像を思い描き、彼らに自身の手足の能力を付加させ、はじめて人型として地面に立つ。

以後、朱い月に憧れに似た感情を抱き、朱い月——プリュンスタッドにのみ忠誠を誓う死徒となった。

二十七祖が真相側から離反し、朱い月が崩御した後、隠遁を決め込んでいたが、何を思ったのか敵である聖堂教会に所属する事になる。



Explanation

## デモニッション

メレムの持つ技能。第一階位の降霊能力。

具現化できるのは他人の願望だけであって、自分の願望ではない、というのがミソ。いかに強力な能力を持っているように、自分一人では何もできない、というのがメレムの在り方。まさに悪魔のものである。

空想具現化に近いが、メレムの悪魔召喚は人々の願望をモデルにし、それをメレムの権限によって彩色し類似品を作る、というもの。

悪魔たちの能力は人々のイメージにそったものだが、その造形はメレムのイメージによって形づくられ、能力の大小はメレムの魔力によって変動する。

メレムはその性格上、現実的・打算的な悪魔の具現化は得意ではない。

彼はあくまで空想の世界に生きるビーターパンなので、得意とする絵、描きたい空想は“童話に見るような悪魔”なのである。

空想を飾ったような  
シルバーの球



Source

## 出典／月姫読本・talk

月姫から数年後の、ちょっとしたエピソードに登場。一人怪獣大決戦。ソロモン王とは名前ぐらいしか関係ありません。

あくまで予定であり空想だが、the dark sixでも登場予定。……ほんと、どんな話になるんだ一体……。





Introduction

## 四大魔獣

フォーデーモン・ザ・グレイトビースト。  
二十七祖の一角でありながら埋葬機関に所属する死徒、メレム・ソロモンの手足たる使い魔。  
一体で一つの祖に匹敵する、と言われている。  
それぞれが神獣クラスの空想上の生き物だが、そもそもありなん、全てメレムが“文字通り”想像した、四大の悪魔たちだ。  
地上のいかなる生態系にも属さないが、しかし、地上のあらゆる生物へのオマージュである。

Source

出典／月姫読本・talk, the dark six

死徒メレム・ソロモンに従うボスクラスのモンスターたち。talkでは右足の悪魔が登場。いのようにやられていたが、思考林と鯨犬との相性は最悪だったという事だ。

また、名前がないのは“悪魔を安易に名付けてはならない”という決まりから。メレムもカッコイイ名前をつけてやりたいらしいが、名前をつけてしまうと本当に自由になってしまうので出来ならしい。



## 左手の悪魔

クラス：ネズミの王さま。  
 ユーザー要求：他人への憧憬、変身願望の具現。  
 デザイン参考：聖堂の天井裏に住んでいた友人たち。

ネズミ界のヒーロー、アイドル。  
 戦闘能力は皆無だが、人間であれば完璧に姿を模す、  
 という変身能力を持つ悪魔。

人間社会において司祭としての地位を持ち、かつ、  
 この世で三番目ぐらいに美しいネズミとして、地下、  
 天井裏、排水溝、家具裏、といった隙間の隙間コミュ  
 ニティにおいて絶大な支持を持つ。

「左手」自身も司祭としての自分が気に入っており、  
 メレムと人間とネズミたちの為に、日々のんびり働い  
 ているのであった。

「……おっかしいなあ。君、人間好きって設定だった  
 っけ？」

「ワタクシ、ピッツァがある限り人間の味方をいたし  
 ます」

などとメレムとやりとりをするチーズ好き。

また、ネズミたちに  
 「ねーねー、キミのどこが“大”魔獣なの？」  
 とつっこまれる度、申し訳なくて頭を悩ましている  
 とか。



## 覚書

少年の姿から成長できないメレムが表にたてる代理  
 人。色々な人間に化けるが、基本的には優しい老神父  
 の姿をとる。

、高位の悪魔祓いに見られると正体がとけ、もとの姿  
 に戻ってしまう。

誤解なきよう注釈すると、どのような人間にも化け  
 られる能力は“左手”のものであってメレムのもので  
 はない。メレムが倒りあげたのは人化自在の存在であ  
 って、それを実行するのはあくまで“左手”。メレム  
 本人が大人になりたい、手足が欲しい、と望んだとこ  
 ろで変身はできないのだ。

また、四大魔獣はメレムの手足とされているが、実  
 際は四大魔獣たちがそれぞれメレムに手足を与えてい  
 るにすぎない。

メレムが消えても四大魔獣たちは破壊されるまで消  
 えませんが、四大魔獣が消えればメレムは手足を失って  
 しまい、その度に彼らを再想しなくてはならない。

四大魔獣たちにとってメレムは想望主だが、絶対に  
 必要なものではない。ただ、自身が破壊されてもメレ  
 ムがいる限り再想されるので、恩義らしき忠誠心は持  
 ち合っているようだ。



お台所  
 メレム柄





Explanation 03

## 右腕の悪魔

クラス：陸の王者。  
ユーザー願望：神罰、大海嘯の具現。  
デザイン参考：聖堂を飾っていた動物たちの彫像や  
刺繍、または聖堂自体。

破壊の黒犬。終末の鐘。神の獣。鯨犬。  
メレムが好んで引き連れる。制圧・破壊専用の悪魔。  
これといった特殊能力はないが、全長200メートル近い巨体だけで十分すぎるほど“悪魔”として成立する。

本当はもっとカワイイ犬の姿にしたかったらしいのだが、メレムの画力は妙に偏っているようだ。  
“足”たる魔獣たちには人間的な知性はなく、メレムの命じるままに行進する。メレムは大好きなのが、“左足”よりはこちらの“右足”の方が言うことを聞いてくれるようだ。

Explanation 04

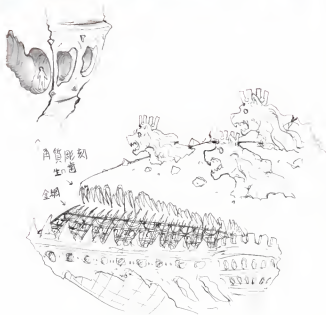
## 覚書

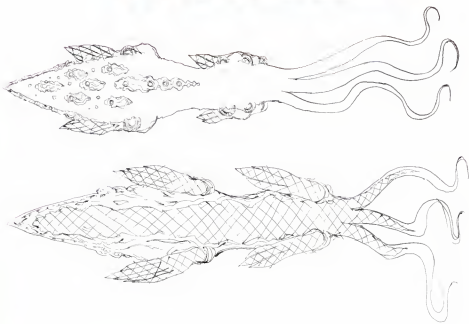
他の悪魔同様、四大魔獣もメレムとは独立した生き物である。

彼らはメレムが想像した架空の悪魔だが、一度描き上げられた像はメレムから一人歩きをします。想造主であるメレムの言うことは聞くが、その在り方・信念まで探る事はできない。

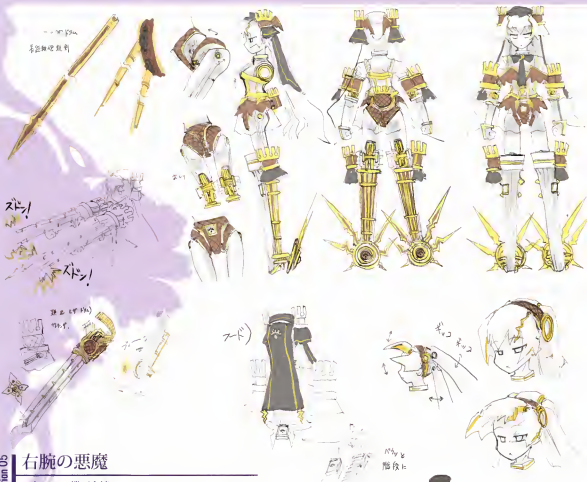
人間、頭の中で思い描いている分にはいくらでも手を加えられるが、一度カタチ（像、絵）にして世に出してしまったモノには手を加えられない、という事。

そう。いかに想造主といえど、世に出してしまえば、手元に残るのは所有権だけなのだ。









Explanation 05

## 右腕の悪魔

クラス：機巧令嬢。  
ユーザー願望：銃剣、戦争の具現……を建前にした人形萌えの具現。もしくは、天使を騙る悪魔。  
デザイン参考：聖堂の女神像、葬式。

巨大ガラクタ擬人化少女ソードちゃん。  
全長10メートル前後のリビングギアスタチュー。  
四大魔獣の中で唯一、積極的にモデルチェンジを行うオシャレさん。基本的にはダウナー系の、やる気のない女神像さまである。

通常はマスクで顔を隠している。滅多なことでは取りません。移動聖堂でもあり、腹部にはちゃっかり階段と入り口が。

偶像なので最低限の知性しか持ておらず、あまり融通がきかない。例えるならファミリーベシック並の演算能力。命令されたコマンドを中々デリートできない困ったさん。まるで停止ボタンを押したのに印刷を止めないプリンタのようだ！

武器を象徴する悪魔だが、原則として「個人が所有できる武装」に限られる。兵器の発展と共にデザインは細かく変化していったが、百年ほど前からこの形状に落ち着いている模様。



Explanation 06

## 覚書

メレムが出し渋っているのか、滅多に現れない四大魔獣。ウルトラセブンで言うのならウイングダム。人気があるのに出番は少ないというキャラ立て。

余談ではあるが、初期段階ではV2ロケットの擬人化として考えられていた機巧魔獣。

対象に射出、命中と共に人型に変形して切り刻む、というロケット弾的インテリジェンスソードだったのだが、悪魔なら一体ぐらいいは擬人化しないと、という事からこの芸風に変更。あと、個人的にPFALZ氏のメカ少女が見たかったのは内緒です。



## Explanation 07 左足の悪魔

クラス：空の王者。  
ユーザー願望：放浪、解放の具現。星を指すもの。  
デザイン参考：聖堂の床の模様。鳥の話。

あらゆる動物たちの集合体。空を泳ぐ獣の王さま。  
“右足”と同規模の巨大な悪魔。タイル状の皮膚には  
様々な動物たちが収められている。空中要塞といった  
趣きだが、空を行くものの宿命か、その翼が地上に触  
れると消滅してしまう。

メレムの想像した悪魔たちの中でもっとも美しい。  
“右足”は殲滅戦に特化しているが、こちらは超敵の  
敵との一騎討ちに特化している。……まあ、たいてい  
は致命傷を与えた後に落下し、霧散してしまうのだが、  
メレム的にはコストが高すぎる兵器という扱い。

## Explanation 08 覚書

四大魔獣——メレム・ソロモンは奇異な色彩を誇  
る二十七祖たちの中でも更に一段際立つ“異物”とし  
て扱われる。

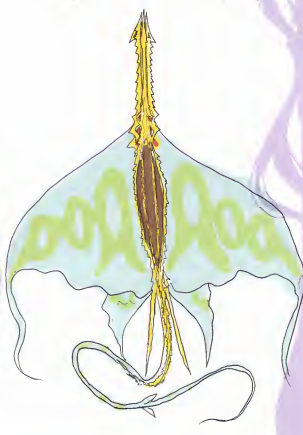
精巧に描かれた風景画に、アニメ調のキャラクター  
が付け足されるような感覚だろうか。

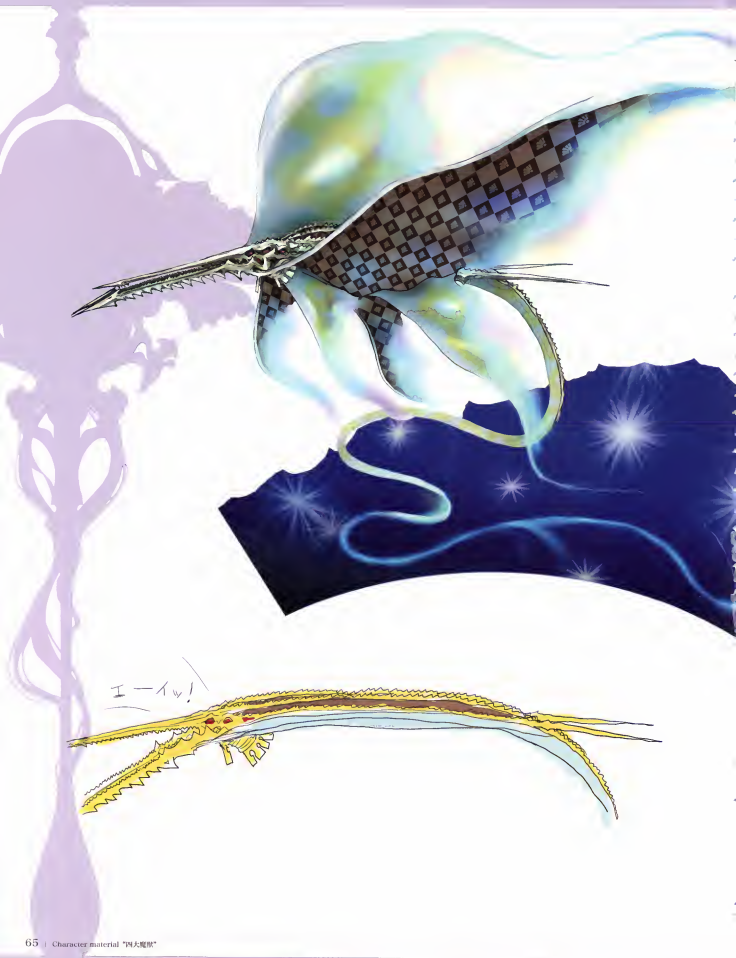
固有結界は個人の心象が現実を塗り替えるものだが、  
メレムの四大魔獣は人々が坐った童話の世界からの、  
現実への報復なのかもしれない。

四大魔獣はメレムという子供のラクガキがカタチに  
なったモノ。故に、彼らが現れると風景は極端にリア  
リティを欠いてしまう。

そのアンバランスをだすため、四大魔獣のデザインは  
まったく違う世界観を持つゴチック絵師・PFALZ氏に  
お願いした。

……その成果は語るまでもないだろう。街中に没し  
た“右足”である巨大な獣の背中。獅子の彫像たちな  
らぶ黒色の草原でぶつかり合う、二人の主人公の姿を、  
著者はたしかに夢想した。つーか書きたい。





## Prelude III

狭い聖堂だった。

陽射しの恩恵もなく、油の匂いもなく、人の気配もない。集まり、声をあげるのとは友人であるネズミたち。

聖堂のただ中、かつて義虫のようだった自身が吊られていたあたりで、司祭はお喋りに耳を傾ける。

「一時的な協定は結ぶけど共同戦線は張らない……？ 呆れたね。死徒殲滅が第一だけど、本言は自分たち以外はみんな敵ってコトか。」

……まったく。吸血鬼退治が本題であり大義だったのに、今じゃそんなのは消化試合扱いで、本当に殺したい相手は別なんだからなあ。いつまでたっても他人の血が好きなんだね、人間っていうヤツは」

やれやれ、と司祭は肩をすくめる。

純白の法衣に金の刺繍をほどこした、決して表に出る事のない特別な信徒の姿。

その豪奢を纏うのはまだ幼い少年であり、その高説を聞けるのは人語を解さぬ獣たちだ。

「苦勞さま、右手によろしく。しばらくは局長のご機嫌とっておいて。できるだけ仕事を押しつけて、手を空かせないようにね。なにしろあの人の好みを殺し合いた、隙あれば参戦しかねない。そうになったら泥仕合どころの話じゃない。いまだき殲滅戦なんて疲れるだけで、見せ物としちゃあ三流だ」

こくこくと頷くネズミたち。

その何匹かは彼らのアイドルの下へ走っていく。

司祭と右手は固い絆で結ばれているにしても、意見の交換は彼らなくして行えないのだ。

そうして、残った友人たちは司祭を氣遣うように声を潜め、毛という毛を強ばらせた。

### Explanation

### ／聖堂【用語】

それが、かつて幽閉されていた世界。牢獄であると同時に心地よい重壁でもあるのか。自由になった後も、それは外の世界を傍観し続ける。

かつてそれが想像した数多の“願い”は、この聖堂にあるものをモチーフにして生み出された。

それが壊れ、歪んだ唯一の外界は朱色の月のみであり、以後、月をモチーフにした聖像はタブーとされた。

沈みゆく船から逃げ出す時のように。たつたいま感じ取った、死の気配を警戒して。

「……ああ、ありがとうみんな。でも心配はいらないよ。古い友人だ、口上もなしで僕がかつてくる事はないさ」

ネズミたちに語りかける。

聖堂の上には、バサリと、一際大きな鳥の羽音が舞い降りる。

「やあ、久しぶり。例の話をしに来たんだろ？ 聖堂教会と魔術協会、君はどちらが優勢だと思ってる？ ああ、ボクたちについて答えはなしだ。そんな分りきつたコト、言うまでもないからね」

天井を見上げる事もなく、司祭は千年来の友人に話しかける。この絶壁の聖堂に如何なる知識、如何なる方法で訪れたかは問うまでもない。

羽音の主は司祭と同じく祖に連なるモノ。

此処がどのような魔境秘境であろうと、隣人を訪ねる事と大差はないのだから。

「君は魔術師側と見るのか。ま、あの町は時計塔のお膝元だし、戦力の補充に関しては優位だけど……へえ。あのバルトメロイがわざわざ。それは驚きだな。フリーランスにも声をかけてるだろうし、始まつちやえは魔法使いもやってくるだろう。……たしかに、その面子に比べれば教会側は戦力不足かな」

アルズベリ・バレストイン。

何十年も前から進められてきた大儀式。

魔術協会も聖堂教会も知っていたが傍観し、かつ、あわよくば首を独占しようと監視しあう、ちよつとした聖地となつた土地。その平穏もあと少しで消え去ろうとしている。

「けど、代行者など問題ではない、は驕りすぎだよ。場所が場所だ。あの人たち、あの国なら相手がなでだろうと手は止めないよ？ 死徒も魔術師も、善良なプロテスタントも見境なしだ。ほら、君もボクも、生き血がなくなつたらわりと困るんじゃない？ 昔から長丁場には兵糧費あつて言うし。そのあたり、あつちのトリ頭は分かっているのかな」

確かに魔術協会の戦力は聖堂教会を凌駕している。だが死徒に比べて、教会の代行者こそあらゆる面で難敵だ。極論ではあるが、魔術師は彼らと同類、神祕への在り方が同じであるのなら、純度の高い彼らの優位は揺るがない。彼らにとって脅威となるのは神意を語る人間である。

となると当然、教会の勢力など魔術師との殺し合いで早々に退場してもらいたいのだが、そう都合良くはいくまい。事は三すくみとまではいかないが、微妙なパランスで成り立つ勝者状態と言える。

その渦中に、全ての勢力に比べて敵ではない姫の到来を、司祭は心待ちにしていた。

司祭にとって、主役と呼べるのは黄金の姫君のみ。それ以外のモノなぞいかな強者と言え譲るに値しない。

それは羽音の主と同じこと。司祭は祖の中でも裏切り者として扱われている。本来、教会側についてた彼を同格と見る祖はいない。

だが、

「あれ、なにさ、白翼の肩を持つ？ 今回のあいつの功績だつて？ ハ、冗談。あいつにあんなシャレのきいたお唇立てができるもんか。あいつの頭じゃ村を死者まみれにして、すぐに教会に取りつかれてたよ。アルズベリの仕込みは純粹に、死徒の力を用いず人間社会に地位を築いたヴァンの仕事だ。……まったく。あいつもさ、白翼は古いとかいって離反した

## ／白翼公【人名・死徒】

トリアム・オーテンロッゼ。

最古の死徒。二十七祖の一人。17位。

魔術師から吸血鬼になったもの、朱い月の最初の奴隷、とも。

典型的な吸血鬼で、現・死徒の王。二十七祖を代表する死徒で、形式上だけなら最大の発言力を持つ。

劇中に真相隠りを提案した死徒であり、ネロ・カオスが極東の地で果てた原因を作った男。

古き召喚者である真祖たちを嫌い、唯一にして絶対の真祖・プリュンスタッドに敬意を現しているのだが――

のに、なんで今さら仲良くなるのかなー。わかんないな。あいつの本社とか食べちゃいたいな。え？ なに、二人とも仲は最悪のまま？

……ふーん。なんだ、ヴァンのやつ出資しただけなんだ。最近のカジノ船にかまけて放蕩してる？ それは結構。このところ妙に堅物だったけど、昔の自堕落さが戻ってきたな」

くすくすと司祭は笑う。

ヴァン＝フェム。二十七祖の中でも変わり者なその死徒を、司祭はいたぐりに入っている。

彼は新しく、賢く、引き際を心得ている。

そんな、いつまでも鮮度のいい死徒がカビの生えた儀式に執着する事を、司祭は心苦しく思っていたのだ。

なにしろ、彼とはもうしばらく仲良しでありたい。儀式を破壊する側のモノとして、彼が本腰でないのは喜ばしい。

「けど、そうすると主催は白翼だけなんだね。あいつ、頭悪いしなあ……そんなんじや今回は」

万が一にも、うまくいってしまうかもしれない。

白翼は死徒の王を気取る祖父が、事実、それだけの勢力を持ち、さらに質の悪い事に、それだけの力を持っている。

頭は悪いが無能でないのが困りもの。

そんな男が第六の内容、その真価をまるつきり曲解している、というのも、司祭にとっては試みの種だ。

「ね、誰が呼ばれているか聞いてる？ 白翼の事だから子飼いの死徒を連れてくるだろう。最近じゃルヴァレあたりか。え、とくに滅ぼされた？ それは良かった。三つ子なんて趣味悪いからね。

にしても先月か——予想より早いなもう少し手こずると思っただけ……これは些か、評価を改めないといけないな」

ともあれ、期限は近い。

招集される祖は少なくとも六鬼。

第六は死徒たちにとつての悲願だ。それを取り仕切る白翼から召喚が来ては、いかなる祖も無視できない。

……少し、十位だった祖に同情する。

どうせ命を終えるなら、あんな戯れから生まれ戯れなどではなく、本当の戯れで消え去れば良かったのに。

「……まあ、魔術師あがりである彼に招集はかからなかっただろうけど、原液持ちは限られている。最も古い死徒なんて言っているけど、その中でも本物は一握り。

となると——もちろん、君にも招待状は来ているだろう、グランスルグ・フラックモア？」

羽音は静かに。

その名で呼ばれる事を不快げに、一度だけ羽ばたいた。

『そういう貴君は、参列に同意をしたのかね』

『聖堂に張りついている男性の音が響く。』

『するよ。ただし教会側としてだ。局長からの勅命だし、その方が戦力的に面白い。……ああ。ようやく敵同士の白翼公。一度、君とは本気で戦ってみたかったんだ。だつてほら、空の王さまが二つもあるのは、色々とかやこしいでしょ？』

親愛と殺意のまじった微笑。

割合は親愛の方が強い。少年司祭はわずかな殺意と、同胞としての大きな親しみを羽音の主に持っている。

それを。

『……そうか。やはり、貴君とは気が合わない。一度だけと言わず。私は常に、君を八つ裂きにしたかった』

黒鳥は、押し殺した、完全な殺意で吐き返した。

## ／ヴァン＝フェム【人名・死徒】

Explanation

ヴァレリー・フェルナンド・ヴァンデルシュターム。

二十七祖の一人。14位。世界の魔王。人形師。七大ゴースト「城」を創りあげた。

人間社会に関心を持ち、第一次大戦後から放逐手段を用いず勢力回復を期していき、という試みを始めた変わり者。

この頃はセレブの町・モナコにビルを構え、週に一度はカジノ船で人々の博覧を受け付けているのだとか。

「そうなの？ でもヘンな話じゃない？ それならすぐに始めればいいのに。どうして千年近く我慢してたんだ、君は」

「私闘はしない。私の闘争理由は、唯一、朱い月の御のみ」

ああ、と司祭は懐かしそうに、嬉しそうに頷く。

それが彼らの共通点。

共に忠誠を誓ったのは唯一人。その在り方の前には、死徒としての在り方など塵芥。彼らにとって、それは神聖不可侵にして、決して汚してはならない信念だ。

羽音の主は闘争を好まない。

彼が戦場を生み出すとしたら、「主」の教えを忘れた死徒を正す時か、「主」の願いに添う時のみ。故に、どれだけ憎くても四六の悪魔とは戦わず。この年、この月。

「主」の定めた儀式に参加する事で、ようやく、理由を問わずに祖との殺し合いができるのだ。

「……まだ覚えていたんだ、トリ頭のクセに。いや、君も古いね、どうも」

罵る声には親愛だけがあつた。

司祭はその一点だけで、羽音の主を生涯の友と感じている。忠誠の在り方は違えど、お互い身を捧げた者は同じ。ならば、なぜ憎む事ができようか、と。

「アルズベリには新しい物もやってくるだろう。僕らが主とするプリュンスタッドは金の姫だけだ。それは分かっているだろう？」

『……心得ている。その件に関しては、貴君と志は同じだ』

「それは良かった。うん、いずれ戦うとしても君がいてくれるのは心強いよグラン。ボク一人じゃあいつの護衛と相談がいたいところだ。死徒殺しの君がいるなら、今度こそ――」

司祭の大切な姫から美しい髪を奪った、あの黒血の月蝕姫を討ち滅ぼせる。

「それじゃあ、また。」

百年ぶりの再会を楽しみにしているよ、鳥の主」

司祭は満足げに、黒鳥は冷めた羽ばたきを響かせて飛び立っていく。……ここに、一つの結末が生まれた事を司祭は知らない。その無邪気さ故に気付かない。

羽音の主にとって、同じ主を抱くからこそ、少年の変容を交えた忠誠こそ最も度し難い罪なのだという事を、その相容れない忠誠のカケ子を、彼はいずれ思い知る事になる。

――その最期に。

不滅と謳われた悪魔たちがことごとく消え去った後、

主に会おう前の、夢を見るだけだった、ただの「物」に還つた瞬間――

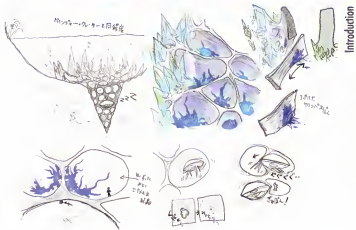
## ／姫君【名称・俗称】

金色大好き、黒いの手。

司祭が口にする姫君、とは言うまでもなくあの人のこと。このお子さまは口を開けば彼女の口トばかりである。まったく成長していない。

一方、姫様は相変わらず司祭が苦手で、彼の友愛はものの見事に空ぶっている。反面、黒い方の姫さまは司祭が気に入っていて、好きあらば食べようとしているとかいないとか。





## Introduction

## ORT(オルト)

詳細不明。西暦より以前に、南米に落ちた突然変異種、らしい。

攻性生物として次元違いの能力を誇る。無謀にも前五位の祖が捕獲を試み、秒殺された。

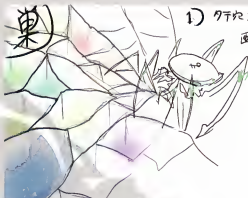
その後、吸血種としての能力があると判明しそのまま祖として扱われている。タイプ・マアキュリー。

全長40メートルほどの宇宙生物。

この地上のいかなる材質より硬く、柔らかで、気温差に耐え、強い、というトンデモ外皮で覆われている。

地球で戦うかぎり弱点はない、とされる。

本体のデタラメな攻撃数値の他に、固有結晶に似た特殊能力・水晶渓谷を持つ。



# 1) クマデ式 くもの巣

面用紙で作ったもの

小体足

中体足

大前足

小前足

大後足

内野

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

## 水晶渓谷

それはおぞましくも美しい、異星風景の侵略。

一部の魔術師や二十七祖が「固有結界」と呼ばれる心象世界を操るが、ORTの持つソレはレベルが違ふ。

ORTは「異星からの来訪者」だ。

彼(?)が居るだけで地球は彼の住んでいた環境に変化していく。ようするに物理法則の改竄、「異星秩序」のただ溺れなのである。

人間が地球を滅ぼす種なら、ORTは文字通り地球を異星に塗り替える「侵略者」なのだ。

まあ、幸いORTはぐうたら蜘蛛さんなので、地球を傷つける気はないのだが。……や、侵略行為に興味がないのかもしれない。

タイムスケジュールを間違えてやって来てしまった彼(?)は、約束の時まで水晶渓谷に閉じこもっていると思われる。

しかしそんなORTの事情は人間に分かる筈もなく、いろんな機関のお偉いさんはこんな危険生物は一刻も早くどうにかしないと、とちょっかいを出しては返り討ちになるのであった。

## 覚書

基本コンセプトは「どうしようもない絶望」。

RPGで言うならラスボスより強い隠しボス。何これゲームバランス考えてないでしょ、いえいえそんなのに手を出した貴方が悪いのです。

ORTはどうあっても地球の文化を学習できないが、捕食した生物を一部模倣する能力はあると思われる。

(擬態なので仮に「人間らしい物言い」をしたところでリピート行為にすぎない。そこにロマンを求めるのは個人の勝手だが、さて)

ちなみにORT的に今まで一番味の濃かった地球の生物が前五位の二十七祖。

余談ですがORTが移動するだけで木々が結晶化し、クリスタルの渓谷になる……という初期ヴィジュアルイメージだったのだが、PFALZ氏の「蜘蛛の巣にみたてた水晶渓谷」のアイデアが素晴らしいし、そちらを採用させていた。

余談だが、PFALZ氏にお願いしたデザインの数々はここに載せられた情報に元々、氏が面白おかしく編み上げてくれたもの。か、敵わねえー! まさに未確認飛行物体。まさに最強の攻性生物。まさに別次元の素敵デザイン。つかこんなのアルクでも勝てないよ! だ、誰かウルトラ○ン連れてきてー!

## 出典／???

水屋(?)のアルテミット・ワン。

SF短編「notes」で登場するアルテミット・ワンたちのお仲間……なのだが、何を間違ったか一足先(五千年くらい)に地球に到着してしまったドジッ子。

……実は、地球が発信したSOSサインを受け取る最強種ではなかったりする。

ちなみに直死の魔眼ではコイツは殺せません。死の概念がないので物理的に破壊するしかないのである。



内野

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

大前足

大後足

小体足

中体足

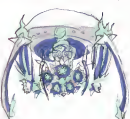
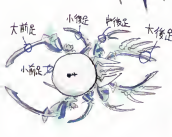
大前足

大後足

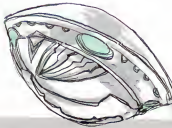
小体足

中体足

## 〈ビーストモード〉



## 〈VFOモード〉





## 有間都古

Introduction

三軒町の市立高校に通う、ごくフツウの学生。  
子供の頃から趣味で続けてきた拳法がちょっとだけ特別。空を飛んだりビームを撃ったりはできません。  
都古本人もよく覚えていないのだが、幼い頃にいなかった「お兄ちゃん」をなんとなく探している。  
女の子というより男の子な嗜好、外見で、男子に混じってスポーツに夢中になっている模様。  
女の子っぽくないのは「お兄ちゃんは悪い魔女に連れて行かれたんだ」と覚えている為らしい。  
それがトラウマになって、いまいち恋話に関心が持てない様子。  
スポーツ全般得意なのだが、有り余る才能とガッツをスーパー合気道部で浪費している。  
中学からは裏の空き地に棲んでいるパンダに弟子入りしているとかなんとか。

Explanation

## つまり、それから四年後のお話

さわやか少女漫画の主人公から、唐突に萌えコマ魔法少女物のヒロインにされるサクリファイス第二号。  
(一号はカレイドでルビーなあの)

下校中に二人の魔法少女の戦いに巻き込まれ、あまりのウザさに崩拳を一発くれて撃退。  
今まで負け知らずだった不思議系魔法少女と軍事系魔法少女は都古の強さに驚愕し、  
「し、新ジャンルの魔法少女——！」  
などと勝手に誤認。  
以後、「属性／一撃必殺」系の魔法少女に登録されてしまう。

……激化する（はた迷惑な）戦いの中、もはやここまでな都古の危機を救ったのは合気道部長だった。  
天地を揺るがすファンタズムーン・エクリプスの真祖玉を、なにやら素敵な光線ではじ返す部長。  
まさか、部長も人騒がせな魔法少女だったのか!?  
だが部長はトンデモナイと否定するのであった。  
「違いまして有間さん。貴女、スーパー合気道部をなんだと思っていたのかしら？」  
「え……他の合気道部よりすごい合気道部って事、だよな？」  
「あり得ない程にノン！ 正解は“スーパー合気道”の部活ですよ！ スーパー合気道なんですから、手から波動拳ぐらい出るに決まっているでしょう！」  
「そ、それ合気道違うよ—————っ！！！！」  
うむ、もう手の施しようがないほどベタな話なのであった。



Explanation 02

## パンダ師匠

人間大の、どう見ても着ぐるみの怪しい人。背中に七つ夜と刺繍が入っている。パンダでぬいぐるみのクセに、さびきびとしたアクション。ちなみに扱う武術は中国拳法ではなくごくフツーの暗殺術。都古の拳法もデタラメはつきよくけんなので組み手には丁度いい。愛らしくも無口、いつも気だるげかつ皮肉屋な殺鬼。しかしパンダなのでナイフが持てないのである。パンダ師匠曰く、オレは灯油の入っていないスプーンのようなもんだ。

Source

## 出典／月姫、MELTY BLOOD

スピニングネタ。TYPE-MOONにおいて怪しげな「もしも」ネタは全て一纏めにされている。G C V、ファンタズムーン、マジカルアンバー、カレイドルビー、洗脳探偵、風雲イリヤ城等々、やばい連中が入れ乱れる、ワールドエンド・ミキシングジュースとでも言うべきか。そんな中での都古の立ち位置がこんな感じ。魔法少女の基本スキル・奇想設定を無視してダメージを与えられる、世界に“正しい”設定のマジカルチャイナガール。ま、チャイナ関係ないけどネ！





## Comment

※頭：おまけのラフ設定のコーナーです。最終だし、いつもとーりの封読形式でゆるゆるの進行したい所存。

武内：順々としたデザインを幾つか集めてみました。一応全部Fate関連のデザインになっています。

※内：後から簡単な説明をば。セイバーのメイド服。見メイド服。幽霊のメイド服ですね。ストイックなメイド服も好きですが、実はこういうのもいいという事に最近気が付きました。

※外：人間のし念一つのは変わるものですかね！ まだまだ君いってコトさ！ あと、hollowマスターアップ。ヶ月間「このエピソード、絵がないと意味ないよね」と侮られたうちのメイド上級大尉（タケコッチャー）がセイバーばかりか、他のヒロインたちのメイド服までマスターアップに懸って描き上げたのは冒険・6000史のつに情に思っています。

※内：マスターアップ前画という局面が、取っていた俺のメイド力を目覚めさせてしまったようだよ。

さて、お次は、各キャラに新しい服が追加された本口では誰にも新しい服追加される予定があったのですが、諸事お断り。まー、色々苦戦はあったし。カレイドとか増えとかこの面白きんだけどなー。採用されなかったのが残念です。つーか増えをまるっきり替えたらファンディスク違いすよな。あと、カレイドルビー、諸君、ともにプロットには「ミクロンも書かれていないのに式でんか勝手に描いたもの」という事実も、もったいなく思っています。

武内：さて、お次は最終対決で新しい俺の機動丸。趣味全部のデザインです。とにかく和風（和弓）のイメージがあったので、このようなデザインになりました。

※外：……何事もなかったようにスルーだよ。あ、この絵が出てくるシーンの。私腹で戦うライダー。を強く押したのも原典担当です。これは系統に倣ってあげたい。Gパンに1階しのライダーさんかっ……

※内：やはり日常服に戦闘服を少しだけ脱ぎ替えるというのは、結局のところ王道でしょー。ブロードブリッジは、デザイン的に最後に残ったサービスマンの全部をつぎ込んだような感じでした。

で、ウェディングドレスはアニメ用に設定をなおしたもので、セイバーと同系統の、俺の旧作の騎上も基本的には同じ感じですね。編年型セイバーというか、ちなみにモードレッドは新装甲のセイバーというコンセプトになっております。



武内：ハゼットの一番初めに描いた設定ですね。この一枚に、ハゼットの全部が入っているような感じがする。  
奈須：はい。はじめは音楽でイメージされていたハゼットですが、色々あってこのカラーに。こちらからの提案として、スーツ姿のカッコイイ娘を、発汗したら、こんな素敵な萌えキャラが……！  
な、なにをした武内！？

武内：男医の職人というキャラとしては既にある種の思入れがあったものの、スーツを着ないようじゃーとお願いしつつ、川原野村の紙版即完全版を見ていたら、そこに天啓が訪れていたのよ！

奈須：ま、麻紀絵からきていたのかっ！？……いま初めて聞きましたよ、それ。……しかし、そうか……あの、スーツ・シグナ・カット・人外の、………の神聖………を定めた麻紀絵さん、奈メットさんが生まれようとは……電子だな、ホント

武内：ひてえ言われようですな。ちなみに受けた天啓は、スーツで……スとか、そういうのが下です

あとは使うことの出来なかったカレンの私服。マジで使いたかったんだけど、マジで使うところがありませんでした

奈須：んな事はない。描いてくれば、Hジーンズの後に使えたよ。………か、当然Yシャツや靴があると思ってシナリオ書いてたヨ

武内：………はっ？！そうか！しまったよ………！







Comment

武内：子供達です。上郎は歳の、生憎さそうな感じが泣く可愛いんじゃないかと思うんですが、どーなのでしょーかー

奈須：子供！顔が可愛いのは当然として、極の可愛さはどうなのか、ミミちゃんにも負けないぜ！

武内：極は個人人間に改造される前ということで、髪や目の色が過激人間です。まだ髪を髪で隠したりしていない啦。きつと活発な子供だったのではないかと妄想します。くせっでも過取っばいですな。

奈須：目目は現物ですね、うらー。(涙) そりゃ過激さんも縁結えになります。さげげに赤い眼に黒いボン、というのもきついなあ。でもまあ、その代わりに顔にはないモノを手に入れた武ですが！(ヒント：動物)

武内：このままの姿で成長していたらどんな娘さんになったのでしょうか。





## Character material

### STAFF

テキスト・総監修  
奈須きのこ

見開き内表紙  
MORIYA

表紙・挿絵  
simo

グラフィック  
蒼月貴雄  
MORIYA  
simo

編集  
WINFANWORKS

協力  
TYPE MOON ALL STAFF

発行者  
竹内友崇

制作  
TYPE MOON

印刷  
株式会社 高山

2006年8月11日 初版発行

**Tm**  
TYPE MOON

<http://www.typemoon.com/>